

山本多助筆録「サコロベ」のテキストとその言語的特徴

阪口 諒

キーワード：アイヌ語 アイヌ口承文芸 山本多助 サコロベ 英雄叙事詩 道東方言

はじめに

山本多助筆録「サコロベ」は『アイヌ・モシリ』第6号(浦田遊編1998に収録)に掲載されている物語である。これまでこの物語の全訳はなされていない。語り手の本間氏は「ヤムワッカ・コタン」に居住していた方で、山本氏は釧路で生まれ育ったアイヌであるが、山本多助氏によるアイヌ語の筆録はアイヌ人によるアイヌ語の記録としても特筆すべきものである。この物語はタイトルからも分かるようにサコロベというジャンルに属するものであると考えられる。これまで公にされたサコロベのテキストは少なく、そのジャンルを考えるうえでも貴重なものである。また、これまで山本氏のアイヌ語を検討したものは多くないが、山本氏の筆録資料はかなり正確に書かれている印象を受ける。このテキストのアイヌ語に関して気になった事項については末尾で若干の検討を行った。また以下で紹介するようにこの「サコロベ」はすでに梗概が作成されているものの、梗概には訳出されていない部分が多くある。そのため全文を解説するにはかなりの困難を伴い(もちろん筆者の力が十分でなかったところが大きい)、不明な箇所も多く残った。訳に関しても暫定的なものといわざるを得ない状況である。今後、公開される資料が増えることで不明箇所を明らかにできることを期待している。そして、『アイヌ・モシリ』が刊行された目的にかなうことを願っている。

1. 「サコロベ」に関する基本的情報

1.1. 筆録者 山本多助氏について

「サコロベ」の筆録者は、釧路春採で生まれ育ちアイヌ文化の伝承・発展に尽くし、著述家としても活躍した山本多助氏(1904~1993)である。山本氏はアイヌ語母語話者であったと考えられ、数多くのアイヌ語の記録を残している。山本氏の経歴や著作一覧は既に松本編(2005: 167-201, 205)で詳しく触れられている。『アイヌ・モシリ』中の山本氏が筆録したものの多くは浦田遊編(2002)でアイヌ語のローマ字表記化、日本語訳がなされている¹。【釧路語彙】はそうした山本氏の作品中のアイヌ語を中心に編まれたものである。『アイヌ・モシリ』には山路廣明氏、山本氏を中心とした執筆者が、初期には釧路の伝承を中心としながらも、のちに沙流や白老、樺太の伝承、随筆、手紙などを掲載しており、創刊当初の子供たちの教科書にするという目的もあつてか内容の豊富なものとなっている。

¹ このうち原文、日本語訳が【釧路語彙】に再録されている。

1.2. 語り手 本間フミ氏について

語り手の本間氏に関する情報は掲載されていないため詳細は分からないが、名前の後に「ヤムワッカ・コタン」と書かれているので、現在の北海道中川郡幕別町東部に当たる地域（旧止若村、1963年幕別と改称される）に居住していた方だと思われる。本話の採録年月日に関しては『アイヌ・モシリ』第6号が刊行された1959年以前であること以外には分からない。管見の限り、本間フミ氏の伝承の聞き書き等はこれ以外に見つかっていない。

1.3. ジャンルについて

この資料はタイトルからも分かるようにサコロペである。これまで公刊されたサコロペの数は多くない。金田一京助・知里真志保をはじめとした研究者は、サコロペは北海道西南部のユカラに対応するもので、名称と主人公の呼称が違うだけだとしてきた。例えば、知里（1955）は「英雄詞曲」の解説で、「これは人間の英雄を主人公とする比較的長篇の叙事詩で、地方によって名称と主人公を異にする。」と述べている。そして、「サコルペ (sa-kor-pe)」に関しては、

「これも本来は神話をさしたらしいが、北海道の中東北部（石狩・十勝・釧路・北見）では英雄詞曲を指すようになっていく。主人公はポンオタサムンクル (Pon-Otasam-un-kur オタサムの酋長の子) 或はポンオタスツンクル (Pon-Otasut-un-kur オタスツの酋長の子) である」

[知里 1955: 120-121]

としている。最近では地域によって名称と主人公を異にするだけでなく、内容にも地域差があると指摘されている。ここでは詳しく述べないが、英雄叙事詩の地域差に関しては中川（2009）、奥田（2005; 2008）が詳しく検討をおこなっている。なお、吉田巖（1953: 84-85）に掲載されている音更の小川エタエクル氏による説明によれば、「シャモの浄瑠璃、アイヌではサクルペだのユウカラだのだ。（中略）シャマイクル・ポイシコッペ・コロポウンクルなどの戦争譚である。」という。そして「サコロペはオタスツウンクル、ユウカラにはポイシコッペ、サマイクルが出る。」とも語っており、サコロペとユウカラの二つが十勝に存在し、この二つは主人公に違いがあるような印象を受ける。似たような証言は釧路の八重九郎氏の語りにも見られる【八重九郎の伝承】1:57。ポイシコッペというあまり耳慣れない登場人物について先ほどの小川氏は「シャマイクルやポイシコッペはアイヌの根元の神だろう。戦具、猟漁具悉皆シャマイクルや^{ママ}などから授けられたものである。神（カムイ）はアイヌにこういうことを教えさせる為にシャマイクルなどをつくったのであろう。シャマイクルもポイシコッペも今生きてるだろうか。どこに居るだろうか。」と語っている（以上の聞き取りは明治40年3月27日のもの）。釧路の八重九郎氏のサコロペに関しては萩中（1994）が詳しい。

この「サコロベ」がどのように語られたかは記述されておらず分からないが、本文は韻文と考えると差し支えないのではないと思われる。冒頭の「okay=an, huskotoy wano okay=an.」という句の後は「iresu sapo 5 / i=resu katu kay 6 / [a=]korampetek. 4[5] / i=kay wa nina 5 / i=kay wa wakkata. 6 / i=kay wa nepta 5 / monrayke ki ayne 6 / itto an ki wa 5 / tane tuk=an ayne 6...」（ローマ字の後は音節数）というように、5, 6 音節を中心とした韻文と考えることができる。

2. アイヌによるアイヌ語の記録

本稿で紹介する資料「サコロベ」は山本多助氏によってカタカナで書かれたものだが、こうしたアイヌによるアイヌ語の記録に関しては切替（1997）、中川（2006）が詳しい。とくに中川（2006: 25-26）では山本多助氏のアイヌ語表記についても触れられている。表記法が確立されていない中で話された言葉を書くことは非常に難しくその困難さを考えると、語られた言葉そのままでは考えにくいにせよ、この物語テキストはかなり正確に書かれているという印象を受ける。なお、アイヌによるアイヌ語テキストの筆録やその分析はいくつかなされているが、十勝地方に限って言えば、沢井トメノ氏自筆のカナ書きテキストを分析した切替（1998a）がある。山本氏のアイヌ語の語彙を批判的に検討したものに伊藤（1978）、文法などに関しては切替（2004）がある。

3. テキストの梗概（『日本昔話通観』より）

この梗概の執筆者は書かれていないが、稲田・小澤編（1989）の編集に協力していたアイヌ語学者の浅井亨氏が作成したものと思われる。訳注の際に参考にしたので、以下にその全てを掲載しておく。

姉が私（オタシュウウンクル）を背負って薪拾いや水汲みをして、育ててくれた。大きくなると、姉は私を撫でながら「うばゆり掘りにいってくる」と言い、戸も窓も鼠穴もみなしめて出かけたので、私は上座から下座へと炉の灰をつつきながら一人遊びをする。数日後、何者かが家のそばに降り、戸口から内庭へとすべりこむ。でくの坊のような者がしげしげと私を見て、笑いながら「なんだ、小さいのが留守番をしているんだな。お前の姉は私が殺した。文句があればかかってこい」と言う。私はとび起きて宝壇の陰で身じたくをし、上座へ六回、下座へ六回足踏みをし、「父や母が祈り祭った神がおいでなら、私を助けてくれ」と言うと、郷里の上から黒雲が立ち昇って家の上がまっ暗になり、飛行籠が降りてくる。

私は外に出て、鳥の飛ぶようにして高い枝は枝の下をくぐり、低い枝は枝の上を越えて郷里村の入り口に着くと、姉が倒れている。私は「やっつけるから安心してくれ」と言って、悪者を蹴とばし、切りつけると、ときどき風のようなものが私の体を通り抜けて、私は勇気づけられる。やがて私は眠ったようになり、目を開いてみると、悪者は消え失せている。私はまた飛んで大きな湖の

上手に降り、美しい大路を進んで、飾りたてられた金の家の並びの光り輝く家へ入ると、悪者が私の太刀を受けて倒れており、炉の右座には白髪の老人夫婦、向かいには少女神がいて泣いている。悪者が「妹よ、この刀を早く抜いてくれ」と頼むが、少女神はそ知らぬ顔をしている。老人が「だから決して悪気を起こしてはならぬ。オタシュウシクルは人間だが、神のようだという」と言うが、悪者は聞こうとしない。老人は「勝手にしろ」と怒る。私はじっくり眺めたあと隙間風のように中に入り、片足をかなたの炉端に、片足をこなたの炉端に立て、悪者の首を切り、老人夫婦の頭をはねる。少女は下座から逃げる。私は昼ごろにはその連中をみな殺しにする。誰かが「オタストの弟神、恐ろしいことだ。決して悪心を持たないでほしい」と言う。

私(妹神)はシヌタブカの兄神といた。兄神はいつも彫り物をし、私は毎日針仕事をして、作った晴れ着がいっぱいあった。ある日洗い物をしてもどって寝ていると、「オタスツの小兄神、姉神がいるが行き来もしないでいると、姉神が悪者に殺され、怒った小兄神が飛行籠に乗って毎日戦い、今は悪い鳥がかかってきて、切っても突いても元どおりになっている」という夢を見る。泣く泣くこの話を兄神に話すと、兄神は大急ぎで飛行籠に乗り天空を走っていく。私も女刀を懐にしてその後から飛行籠を走らせ、モトサル川までかけつけ、弟神もかけつけて、三人でオタスツの兄神の加勢にかけつけた。〔以下なし〕(アイヌ・モシリ 6)

[稲田・小澤 1989: 532]

4. テキスト表記の方針

本資料中のアイヌ語の語形に関しては恣意的に変更せざるを得なかった箇所もあるものの、できるだけ原表記を尊重し、ほかに推測される語形がある場合は註に書いておいた。以下にテキスト表記の方針を簡単にまとめておく。

(1) 整理番号

本文の前に数字は『アイヌ・モシリ—幻のアイヌ語誌復刊』(釧路アイヌ文化懇話会、1998年)の掲載頁と行番号を表している。例えば14501であれば、145頁の1行目を表す。

(2) カタカナ表記に関して

パソコンで入力することのできない以下の文字は次のように置き換えた。

ㇿ⇒シユ、ㇾ⇒トゥ、ㇼ⇒チャ、ㇽ⇒チュ、ㇾ⇒チョ、ㇼ⇒イェ

(3) アイヌ語のローマ字表記に関して

アイヌ語のローマ字表記はいわゆる「アコロイタク方式」に準じて行った。人称接辞は慣例に従って

an-ではなく、an=と表記する。また、音が変化した箇所は_で表示する（例：an ma⇒an w_a）。できる限り、原表記に基づいてローマ字に転写したが、知られている語形への引き当てに終わってしまった部分もある。原表記の単なる転写から導き出せないものはおおよそ以下の方針でローマ字表記を行った。この方針には検討の余地があり、今後ローマ字表記に関しては修正すべき点があるかと思う。ローマ字化した部分で[]で囲んでいるのは、あることが予想されるが、表記からは推定できない部分である。

○母音に関して

- ・シンダァのように母音を伸ばしていることを示していると思われるものは、母音の長短の区別はないと考えられるので、短母音で表記した。ただし、母音が連続しているところは母音を重ねた。「トウ」（発音としては tō だろう）のように日本語の長母音表記を受けたと思われるものもあるが、推測される形に直した。
- ・イ段とエ段、シとス、チとツの明確な使い分けは見られないので推測される語形に直した。
- ・オ段とウ段は、本来の音の推定が難しいと考えたため、原表記を尊重し、それぞれの母音を o, u としておいた。一部変えたところがあるが、それは註に記しておいた。
- ・ラ行で書かれているものは、r と r+母音の書き分けがなされていないようなのでこれも推定される語形に直した。

○子音に関して

- ・濁音は清音に、シャ行は s+母音に統一した。

○音節末子音に関して

- ・ンは-m と推測される場合でも-n と表記した。ただし、ンにパ行、マ行が続く場合は-m で表記したところがある。
- ・ク、プは原表記を尊重しすべて-k, -p にした。ツ、ツと書かれていても他の資料、後続の子音との関係から-p, -t, -k と推測される箇所がある。-p はブもしくはプとかかれており、ツ、ツと書かれていないことが無い（パ行が続く場合は除く）と思われる。
- ・ッ、ツが語末に来る場合は、-t, -k のうち想定されるものを書いておいた（-p だと想定されるものはブと書かれている）。

音節末の-p, -t, -k に関して、金田一（1955）から北部方言（石狩・十勝及び天塩・北見地方の言葉）に関する記述を参考に引用しておく。ただし、上で挙げられた地域の人々の発音が必ずこのようになる

のかは検討が必要だろう。テキストへの註ではこうした「北部方言」にみられる子音の同化や、語頭の **h** が脱落している語彙にはくでその右側に北海道西南部や既存の辞書や語彙集で見られる語形を注記しておいた（例：hokke<hotke、ayokpe<hayokpe）。

「北部方言は、sap（《出る》の複数）-te（使役相の接辞）から成る sapte《出す》を satte、また tok《啄む》-pa（複数形語尾）から成る tokpa を toppa、そのほか yapte《揚げる》を yatte、ahupte《入れる》を ahutte、など、みなこの趣である。（中略）その結果は、mat-kosanu《ぱつと起つ》も mak-kosanu《ぱつと明るくなる》も、北部方言は一つになって、どつちも makkosanu で區別が無い。下場所方言では、はっきりと言ひ分ける。」

[金田一 1955: 729]

- ・ク、プが-k, -p と考えられる場合もあり、これも推定形を記した。
- ・ムとムの明確な書き分けはなされていないようだが、-m と推定される場合は、推定形を記した。
- ・シ、ス、シュ、スト書かれているものでも-s に対応すると考えられるものは推定形を記した。

※シュは s, su の場合もあるようである（例、オタシュウンクル Otasut'unkur、クシュ ワ サン kus wa san 「通って下りてくる」）。

○その他

- ・チキは cik を表記している可能性もあるが、カタカナ通り ciki としておいた。
- ・イタキは動詞で用いられていると考えられるところでは itak とした。
- ・ルイは ruye, ruwe の可能性もあるが、シルエ siruwe (14506) ヤイコシルエ yaykosiruwe (14608) のように we と想定される場合に「エ」という表記が出現するのに対し、「ルエ」という表記が見当たらないので ruy と想定した。これに関しては以下の「5. 『サコロベ』の言語的特徴」で詳述する。

5. 「サコロベ」の言語的特徴

本資料は釧路春採で育った山本多助氏によって筆録された本間フミ氏の伝承であり、書かれているアイヌ語が道東方言であることは確かである。十勝は非常に広大な地域であり、内部には多様な方言があったと推測されるが、帯広・本別以外の言葉は良く分かっていない。この資料は十勝のサコロベを書き取ったものであるが、筆録者である山本氏は釧路春採出身であり、そのアイヌ語の影響を受けていると考えられるため、本文の言葉をそのまま十勝の言葉と見なすことは難しいと思われる。実際、テキストを解読するに当たって十勝帯広・本別よりむしろ釧路や白糠、美幌と一致する語形が多い印象を受ける。ただ、これも十勝の言葉自体が釧路などと共通性が高いことを示しているだけかも知れな

い。例えば、音更の小川エタエクル氏は「北見も釧路も殆ど相互に通じた。根室だけは全くわからん。」〔吉田 1953: 84〕と証言しており、十勝・北見・釧路の言葉の近さがうかがえる。本稿で扱ったテキストにはこれまで知られている道東方言の特徴と一致するものが多いが、ほかの資料には見られないものもいくつか存在する。それらの特徴のすべてを取り上げ分析することは筆者の手に負えないので、ここではそのうち、山本氏に特徴的であると思われるものを中心に取り上げる。

5.1. 動詞の項数

まず、動詞の項数に関して取り上げる。これは山本氏の資料に特徴的というわけではないが、筆録という作業を通してにも関わらず、語られたアイヌ語を正確に書いているという印象を受けたので取り上げる。

- (1) トゥイマコタン コオマンフン アンヌキカネ マッコロタム ウソロシケ オマレキワ (15409~10)
tuyma kotan kooman hun(<hum) an=nu ki kane mat-kor-tam us[s]or oske **omare** ki wa
(シクタが) 遠くの村へ行く音を私は聞きながら女の持つ刀を懐に入れて

omare 「～を～<場所>に入れる」は主語と、2つの目的語をとる三項動詞であるが、ここでは、人称接辞が落ちているものの（文脈上分かるのであまり問題はないと思われる）、目的語を2つ（mat-kor-tam 「女の持つ刀」、us[s]or oske 「懐の中」とっている。omare は目的語の1つが「場所」でなくてはならないが、us[s]or ではなく us[s]or oske というように文法的に「場所」になっており、かなり正確に書かれていると思われる。ただし、ほかの山本氏の資料では同じような場面で「コオマレ」〔【アイヌモシリ】 31, 184(558)〕という項数が合わない用例が出現するが、これははじめから書き記したものと聞いたものを筆録したものの違いかもしれない。ただし、山本氏の筆録資料にも「アイヌイタク ラム オマレキコ（アイヌ語に心を入れると）」〔【アイヌモシリ】 389〕というように、この例と同じく人称以外には項数がある例も存在する。

5.2. 場所に関する表現

ただし、場所に関する表現には他の話者に類例が見つからないものが多い。

- (2) イロロン・ワノ イウサロン エネ ヤウナコタツ アンカネ (14509~14601)
eroron wano eusaron ene ya[y]unakotaci=an kane
私は上座から下座へと灰まみれになりながら

まず、eroron、eusaron は以下のように分解できる。

eroron 「上座へ」 <e- 「頭が」 ror 「上座」 un 「～についている」

eusaron 「下座に」 <e 「頭が」 -usar 「下座」 un 「～についている」

沢井トメノ氏（本別）の物語から作成された切替（1996）でもやはり「'erorun [副詞] 上座へ」[188] 「'e'úsarun [副詞] 下座へ」[189] となっている。

この表現に更に wa 「～から」がつく例は見られるものの、ene 「～へ」がつく例は見当たらない。白糠の四宅ヤエ氏の表現では「エロロン ワ エサルン ワ」erorun wa esarun wa 「上座へ下座へと」【四宅散文】229, 231】がある。

山本多助氏はイロロン、イウサロンを名詞的に用い、「上座から」「下座へ」を意図して「イロロン・ワノ」「イウサロン エネ」を用いたのではないだろうか。

(3) **イロロンワ** イワン・シュイ **エウサルンネ** イワン・シュイ トウエン チニカ レウン チニカ アノカクシテ (14703~14705)

eroron wa iwan suy eusarun ne iwan suy tu wan(?) cinika re wan(?) cinika an=ukakuste

上座へ（から？）六度、また下座へ六度、二つの足踏、三つの足踏を重ねた

イロロン、エウサルンの後の wa, ne は格助詞の wa 「～から」 ne 「～へ」だと思われるが、eusarun ne 全体で「下座へ」と解釈して良いと思われる。

なお、山本多助氏のアイヌ語には以下のような例があり、副詞に更に格助詞的な要素が付加されることがある。

(4) **エペライ** オロワ **エペパシュイ** モンワエク。【アイヌモシリ】362】

eperay orwa ipepasuy mon(<mom) wa ek.

川上から箸が流れてきた。

これは切替（2004）ですでに指摘されているように、エペライ オロワではなくオペライ operay が期待される場所である。

5.3. 接続助詞クシュの意味

予期しない事態が起こったときに akus(u)と表現されそうところが、クシュ kus(u)²と表現されている。このクシュは以下の例にあるように inkar(=an) kusu という組み合わせのみで用いられている (inkar+kusu の組み合わせは 6 例出現し、そのうち 1 例のみ人称接辞=an が付加されていない)。

- (5) アンシキ アンマカワ インカラ アンクシュ イキヤ エンベ エノンテレケネヤ
エノンオマン ネヤ アネラメベテク (14906~07)

an=siki an=maka wa inkar=an kusu ikiya wenpe enon terke ne ya
enon oman ne ya an=eram(e)petek

私が目を開けて見ると、その悪い奴はどこかへ跳ねていったのか、どこへ行ったのか
分からなかった。

- (6) イトモンピヤラ アシベ=ノカリ インカラクシュ タンチセノシキソカタ イキヤ・エンベ ソノ
シキダ (15004~06)

itomonpiyar as pe / kari inkar kusu tan cise noskiso ka ta ikiya wenpe sonoski ta / kuttoko
an wa

横窓に立って (?) / そこから見ると、この家の真ん中の座にかの悪者が座の真ん中に / 仰向
けになっていて…

この例だけは人称接尾辞=an が付加されておらず、inkar akusu と inkar akusu の二つの可能性があるが、「インカラアクス」と書かれていない点と、予期せぬ事態が起こったときに視点を動かす描写としてはすべて inkar=an kusu と表現されているので、ここでは inkar kusu と解釈した。これは山本氏だけの特徴なのかは確認できていない。

5.4. 虚辞 p の挿入

- (7) イキヤ イコンノプ アンコシキル イネピタキ (14809)

ikiya ikonnop an=kosikiru **ene p itak i** :

その化け物の方を私は向き、こう言った。

² シュという表記から su, s のどちらかを確定することはできない。例: オタシュツウンクル Otasut'unkur、クシュ ワ サン kus wa san 「通って下りてくる」。

この表現は以下のようにこの物語の筆録者である山本多助氏の文章でも散見される。

- (8) ユリワカ ニシパ サムペピリカ ケイトウム ラッチワ イネピタキ 【【アイヌモシリ】 48】

Yuriwaka nispa sampe pirka keytum ratci wa **ene p itak i**

百合若大臣は気分が良くなり、心が穏やかになりこう言った

切替 (2004: 20) では山本多助氏の「イネピ イタクキ」を **ene itak i** だとし、**enep itak i** のように名詞化辞・p が挿入されるのを誤りだとしている。しかし、この表現は他のアイヌ語話者が語ったものにもこの表現が見られる。以下に四宅ヤエ氏、八重九郎氏、菊池クラ氏の例を挙げる。なお、「イネ イタクキ」に関しては、貫塩 (1978) が筆録したサコロペには「eneitakki」(157, 184, 193 頁) という表記が見られ、**ene itak i** を意図したというよりは **ene itak ki** を意図していたのかもしれない (ただし、ki をどう解釈するかが問題となる。**itak i** が発音上 **itakki** となっているのかもしれない。貫塩氏のテキストには「itak koomare」(73, 118, 148 頁) という例が見られるが、同じような表現は八重九郎氏のテキストでは「itak omare」【『八重九郎の伝承』 2, 48, 59】となっている。

○四宅ヤエ氏 (白糠)

- (9) V i=nukar ki wa / V okay rok i ta / V **ene p itak i**

その人は私を見て/いた時に/このように言いました 【【四宅韻文 2】 111】

この p は虚辞 (特に意味はないが音節数を整えるためなどに韻文中に多く挿入される) の一種だと考えられる。【『四宅ヤエの伝承』 中には **ene itak i** は 27 例見つけることができたが (全て韻文(歌謡を含む)で出現)、**ene itak i** という例は見られないようである。

○八重九郎氏 (釧路) のマツユカラ「神謡」

- (10) V nepan okay? / VV toy ukokosse / **ene p itak i**

その男は/大声を上げて/こう言いました。【【八重伝承 1】 90】

サコロペ

- (11) enuki ki ko / an=kor ekasi / **ene p itak i**

すると/私のお爺さんは/こう言いました。【【八重伝承 2】 79】

【八重伝承】には **ene p itak i** が 14 例見つかったが、**ene itak i** は 6 例である (全て韻文)。

参考：菊池クラ氏（美幌）のサコラウ「神謡」

カタカナ部分は知里ノートの翻刻、ローマ字は筆者、日本語訳は高橋靖以氏による。

(12) ネポカケタ／アンマッコイサヌ／イヌマカタ／エヌアンルエ³

ne p okake ta / an=matko(y)sanu / inuma ka ta / enu an ruwe

その後で／私はぱっと立ち上がった。／宝物棚の上に／ある様子を

[高橋 2006:129]

最初の句は ne okake ta に相当する語句だとすれば虚辞 p と考えられるが、nep 全体が虚辞である可能性がある。例えば、「ネパンココロコタン 【nap】 an=kor kotan (私の村)」【【菊池クラ】 130]、「ネパンコッサポ 【nep】 an=kossapo (私の姉)」【【菊池クラ】 132) という例があるが、nep が虚辞だと思われる。

5.5. 文末詞⁴「ルイネ」

他方言の ruwe ne に該当する形式が山本多助氏の筆録資料では「ルイネ」と記述され、「ルエネ」「ルエネ」「ルイ (イェ) ネ」などの筆記が見つかっていない。イとエの書き分けがなされていないように見える山本多助氏の筆録において、「ルイネ」という形式のみ出現するのは、ru ne, ruwe ne に相当する形式を書き分けていた可能性がある。

「サコロベ」

(13) ネンパクト ネルイネヤ シネアントダ (14601~02)

nempak to ne **ruy ne** ya sineantota

何日経ったのか、ある日のこと

山本多助氏が筆録したものの中には「ルイ」「ルエ」があるが、ルイエ (イェは独自の文字「イ」を用いている)、ルエはないようである。エと言う表記は we に対応すると考えられる。例えば、ヤイコシルエ yaykosiruwe 「留守番する」[14608] (シルエ「留守番する」[14506] という表記も存在する) があげられる。しかし、「ネ」が付加される場合はルイネという形式しか見られない。イとエが混同していると考えられるところも多々あり、「ルイネ」が rue ne, ruy ne, ruwe ne を意図したものの可能性はあるが、なぜか「ルエネ」は出現しない。以下にいくつか例を挙げる (日本語訳・ローマ字は筆者)。

³ 「右横に(enu) an ruwe と註」[高橋 2005: 129] とある。

⁴ 中川 (1995:12-13) 参照。

- (14) イネホツネパコロ エカシ ネヤクカ シサム・イタク ビリカ ハウキキルイネ
inehotne pa kor ekasi ne yakka sisam itak pirka hawki ki **ruy ne**
80歳の長老であっても日本語を上手に話します。 [[アイヌモシリ] 12]

- (15) フシコカイヌブリ ウサ フシコ アイヌ・イタク アナクネ
husko kaynu puri usa husko aynuitak anakne
古いアイヌの風習や古いアイヌ語は
イミンピ イサムベ ポロンノ アンルイネ。
imimpi isam pe poronno an **ruy ne**.
消滅してしまったものがたくさんあるのである。 [[アイヌモシリ] 13]

以下の例はルイとルエの二つの形式が出現する。

- (16) エシクヌワ エク⁵ルイヘ エ・シクヌワ エッル⁶エアン…
e=siknu wa e=ek **ruy he?** e=siknu wa e=ek **rue an**.
お前は生きて帰ってきたのか。生きて帰ってきたんだな。 [[アイヌモシリ] 424]

疑問副詞 **he** が後続する場合にはルイ **ruy** であるが、存在動詞 **an** の前では **ruwe** となるのかもしれない。疑問副詞 **he** の前で **ruy** になると言う現象は山本多助氏の妹である伊賀ふで氏のテキストでも見られる。

- (17) ハポー イサッタ⁶ クンネワノ オマンキ ルイヘ
hapo isatta kunnewano oman ki **ruy he?**
おかあさん、明日朝から行くの? [[アイヌモシリ] 404]

疑問副詞 **he**、コピュラ **ne** の前ではルイ **ruy** となっている。ただし、【釧路語彙】に引用されている「伊賀ふで自筆ノート」には「ソモ エ・エク キルエ ネ ヤ **somo e=k ki rue ne ya** <伊賀>」[228] という例があるが、この「ルエ」が **ruy**, **ruwe**, **ruye** なのかは確定できない。

⁵ e=ek を意図してこのように表記したのだと解釈したが、ek かもしれない。『カンナエツ』二度来給え」（【山本辞典】42）「「ホツワエツ」かってこい」 **hok wa ek** 」（『同』47）

⁶ 永久保秀二郎の記録には「エサッター明日（ミヤウニチ）」（中村編注 2014:62）が出現する。

このように、「ルイネ」という形式は山本氏、伊賀氏の筆録に多く見られるが、ほかの話者においても確認できる。以下は知里真志保が菊池クラ氏が語ったサコラウ「神謡」を筆録したものである（ローマ字表記は筆者）。

(18) イヌマカタ / (ナ) ポナニワノ / エヌヤンルイネ

inuma ka ta / (na) pon=an i wano / ene (y)an **ruy ne**

宝物壇の上に / まだ小さい頃から / ある様子だった (?)

【【菊池クラ】 129】

上の例文 (18) は以下の例文 (19) (=例文(12)) と非常によく似ている。しかし語形の違いが見られる。

(19) ネポカケタ / アンマッコイサヌ / イヌマカタ / エヌアンルエ⁷

ne p⁸ okake ta / an=matko(y)sanu / inuma ka ta / enu an **ruwe**

その後で / 私はぱっと立ち上がった。 / 宝物棚の上に / ある様子を

【【菊池クラ】 129】

例文 (18) では「エヌヤンルイネ」だったところが例文 (19) では「エヌアンルエ」となっている。

(18) の「ルイネ」を文字通りローマ字化すれば **ruy ne** となる。例文 (18) (19) の差は、その後ろにコピュラの「ネ (ne)」が付くか否かという点である。(19) の後ろには「ナーポンナニワノ / アンヌカラ エラマンペ na pon=an i wano / an=nukar eraman pe (まだ小さい頃から / 見て知っているもの)」とあり、**ruwe** は an=nukar の目的語となる名詞句を形成している。それに対し、(18) は「ルイネ **ruy ne**」であり文が終止していると考えられる。

十勝本別 (沢井トメノ氏) では従属節を形成する名詞化辞も文末詞⁹のどちらも **sir / hum / haw / ru** であり [高橋 2013: 129]、他方言で用いられるそれらの所属形 **siri / humi / hawe / ruwe** は用いられない¹⁰。ここで可能性として指摘できることは、従属節を形成する名詞化辞の場合には所属形となり、文末詞の時には概念形が用いられるということである。

広野ハル氏 (帯広) によれば「pasa ruyehe'an. 馬車の跡ツイテル。」に関して「**ruwehe** イワナイ」 [田村・沢井 2004: 290] とある。十勝帯広・本別方言では名詞化辞に **ru** の所属形は出現しないが、名詞化辞の **ru** は **ru**「跡」に由来すると考えられるので、その所属形は「跡」の所属形と同じ語形が想

⁷ 「右横に(enu) an ruwe と註」 [高橋 2005: 129] とある。

⁸ **nep** という虚辞かもしれない。

⁹ これは中川 (1995: 12-13) で立てられた品詞である。

¹⁰ 十勝帯広方言でも **ruwe ne** とならず、**ru ne** という形である (服部編 1964)。

定できる。そう考えると、名詞化辞 **ru** の概念形は **ru**、所属形は (**ruwehe** ではなく) **ruyehe** であるという点から語幹は **ruy** であると想定できる。この語幹の形式が山本氏の筆記などに見られる形式と一致することは興味深い。つまり、**ruy ne** は **ru ne** に否定されるべきものだという点である。ただし、十勝の帯広や本別で **ruy** という形式は出現しないようである。

(20) エキールーネ クス／チエコウチャシクイマ／アンキアウエタン ナ

e=ki **ru(?)** ne kusu / ci=e=koucasku(y)ma¹¹ / an=ki **awe** tan (<ta an(?)) na

【菊池クラ】128

というように「ルー」という形式もある。これを **ru** と想定すると、**ruwe**, **ruy**, **ru** という3つの形式を想定することになるが、この「ルー」は **ruy** の異形態と考えるべきか、先ほどの「ルイ」は例文(21)の「チエコウチャシクイマ ci=e=koucaskuyma」同様に **y** が挿入されたものとするかは検討の余地があるだろう。なお、**an** が後続した場合には **ru** の所属形が出現するようである。例えば、「エエカルワン e=ek a ruw(e) an」【菊池クラ】134がある。赤築三九郎氏(芽室)が語ったと推定できる散文物語でも **an** が後続する「nekon iki wa ene epirka kan ean ruwe ene an (どうやってこんなお金持ちになったんだい)」【北海道教育庁生涯学習部文化課編 2004: 20-21】という **ruwe** を用いた表現が確認できる。

ただし、先ほどから例として挙げている菊池クラ氏のテキストにはこれらの反例となるものも出現する。例えば、「シクヌ ルエ ネクス siknu ruwe ne kusu (神々が生きているので)」【菊池クラ】153というように、**コピュラ ne** と **ルエ ruwe** が結びついている例がある。今後、より多くの資料を精査して使い分けの有無を確認していきたい。

5.6. まとめ

以上、「サコロベ」テキストに見られた特徴のいくつかを取り上げたが、これらが山本氏独自のものかどうかは、ほかの道東方言の資料と付き合わせて考えていく必要があると思われる。文末詞「ルイネ」に関しては、山本氏、伊賀氏を除けば、全て韻文であり日常会話などの文体では異なることが予想される。どこまで道東方言の特徴と言えるかは分からないが、「ルイネ」という表記は知里氏、山本氏

¹¹ 同じ物語に「エコチャシクマ e=kocaskuma」【菊池クラ】127とあり、他の資料でも **kocaskuma** であるため、**kocaskuyma** は **kocaskuma** に **y** が挿入されたものと解釈する。語中に **y** が挿入される例は **matkosanu-matkoysanu** 「ぱっと立ち上がる」【菊池クラ】129、**wano-wayno** 「～から」【菊池クラ】129、**rapok-raypok** 「～の間」【菊池クラ】132がある。

が行っており¹²、*ruy ne* という形式は少なくとも所属形の *ruwe ne* ではなく、*ru ne* に比定されるものだと考えてよいのではないだろうか。

6. 「サコロベ」テキスト

以下は「サコロベ」のテキストに原文、ローマ字表記、日本語の訳註をつけたものである。

14501 オカイアン フシコトイワノ オカイアン イレシュサポ イレシュ カ＝

*okay=an, huskotoy wano okay=an*¹³. *iresu sapo i=resu katu*

私(たち)はおりました。昔からおりました。育ての姉が私を育てるの

14502 トウカイ コラムベテク イカイワ ニナ イカイワ ワクカタ イカイワ ネブ

kay korampetek. i=kay wa nina i=kay wa wakkata. i=kay wa nepta

も分からなかった。姉は私を背負って薪採りをし、水を汲んだ。私を背負って何か

14503 タ モンライケキ アイネ イットアン キワ タネ トウツアン アイネ タネ

monrayke ki ayne itto an ki wa tane tuk=an ayne tane

仕事をしているうちに一日で(?) もう私は成長して、今は

14504 ネットキ ワクカウツ アンキ ニ アフツテ アンキ・アイケ シネアルシュイ

*ne ciki wakkauk an=ki niahutte*¹⁴ *an=ki ayke sinearsuy*

もう水汲みを行い、薪を入れるのも行っているうちに、ある時、

14505 イレシュサポ イコイキ ルキワ イコオノンノ アイネ トウイカシケダ イネ・

*iresu sapo i=koykuru*¹⁵ *ki wa i=koononno ayne tuykas(i)ke ta ene*

育ての姉が私の方を向いて私を撫でたあげく、そうしながらこう

¹² 難解なため読みこなせていないが、貫塩(1978)にも *ruy ne* は出現する。

¹³ この(*hoskotoy wano*) *okay=an* は決まり文句で「むかしむかし」「今は昔」のようなものか。八重九郎氏のサコロベのほとんども *okay=an ike* で始まっているが、萩中美枝氏によると、「私たちがいたらねえ」「私がおりましたところがね」というほどの意味で、民話の「あのねえ……居たんだとさ」にあたるという〔萩中 1980: 88〕。

¹⁴ *niahutte* < *niahupte*

¹⁵ *i=kosikuru* と同じ意味だろうか。

- 14506 オカイ アンレシュピト ピリカノ シルエワ エンコレヤン。テイタカネ
okay i— “an=resu pito pirkanosiru(w)e¹⁶ wa en=kore yan. teeta kane
言った。「私が育てた人よ、しっかり留守番してください。その昔
- 14507 アンキワ イコピリカロッペ トウレプ タア ネイケ トウレプ タア アンマ
an=ki wa i=kopirka rok¹⁷ pe turepta ne ike turepta=an w_a
私たちがして良かったものがウバユリ掘りであるのだが、私はウバユリ掘りに
- 14508 サブ アンナア アナウキ カネ アパイネ ピヤライネ エルムン シュエイ
sap=an na” anawki¹⁸ kane apa ene piyar ene erumun¹⁹ suy
行ってくるよ」と言いながら戸口でも窓でもネズミの穴から
- 14509 ワノ オプッタノ セシケテク キンマオマン。ネヤ オカケタ イロロン・
wano oputtano²⁰ seske²¹ tek kimma(?) oman. nea okake ta eroron
すべて閉めて山へ行った。その後で私は上座へ
- 14601 ワノ イウサロン エネ ヤウナコタツ アンカネ ヤイトウラシノッアン ネン
wano eusaron ene²² ya[y]unakotaci²³=an kane yayturasinot=an nempak²⁴
下座へと灰まみれになりながら一人遊びをしていた。何日

¹⁶ のちにヤイコシルエがでてくるので、siruwe であろうか。

¹⁷ pe が後続しているので、発音としては「ロツ(ペ)」という表記どおり、rop(pe)かもしれない。

¹⁸ アナウキは ani awki が縮約したものだと考えられるが、沢井トメノ氏をはじめ、十勝地方では arawki<ari awki が一般的（静内の葛野辰次郎氏の筆録資料にも見られる）。山本多助氏は引用の時にはアニ、アネ、アリと書き、一定していないようである【釧路語彙】。

¹⁹ 「ねずみ ’erúmun」〔帯広、美幌、宗谷(アクセント表示なし)【方言辞典】187〕。

²⁰ 【方言辞典】によれば北海道内では美幌にのみ oputta という語形が出現する〔267,268,290頁〕。筆録者の山本多助氏とその妹の伊賀ふで氏は oputta を使用する【釧路語彙】90〕。

²¹ 「seta suy seske ermu suy seske 犬の穴をふさぎ、ネズミの穴をふさいだ（子供を家から外へ出られないようにする時の常套句)」（【中川辞典】229）と類似の常套句だろう。『H28 ラジオ講座』4 に掲載のサコロペにも「sita suy wano / erumun suy wano / opitta seske akorak（犬の掘った穴から、／ネズミの穴から、／一つ残らず塞いで）」〔アイヌ文化振興・研究推進機構編 2016: 6〕という句が見られる。

²² 「e’úsarun [副詞] 下座へ」〔切替 1996: 189〕。ここでは eusarun ene 全体で「下座へ」と解釈しておく。

²³ 「yay’unakotaci [1 項動詞] 用例数: 1 語構成: yay-’luna-ko2-taci 自分に灰をまぶす」〔【奥田語彙】171〕。

²⁴ 【方言辞典】によれば、帯広・美幌・宗谷では henpak(hempak)ではなく nenpak(nempak)。沢井トメノ（本別）は hempak。

- 14602 パクト ネルイネヤ シネアントダ ヘマンダ・アンベ アンコロチセ テクサ=
to ne ruy ne ya sineantota hemanta an pe²⁵ an=kor cise teksam
経ったのか、ある日のこと、何者かが私の家のそばを
- 14603 ムダ クシュ ワ サンフマス ネヤブ アパチャエネ エクワ ラッキアパ アパ
ta kus wa san hum as neyap apaca ene ek wa ratki apa apa
通って下りてくる音がする。そいつが戸口に来て垂れた帳、戸口の
- 14604 ランノシキ テクサイカリ タパアン ミンダラ オッタ エテシコサヌ ヘマ=
rannoski teksaykari²⁶ tap an mintar or_ ta eteskosanu²⁷ hemanta
真ん中をつかんで、この内土間へ滑るように入った。なにか
- 14605 ンダ アンベ ウミキワ アヌカラ・アイケ アコタヌ セメクアン チクシ=
an pe umi ki²⁸ wa a=nukar ayke a=kotanu sermak an cikusni
変なものが音を立てたので、見ると我が村の背後にいた。???
- 14606 ニ アチキリコレ アテケコレ アポコンアン シカイマス イシリキ ヌカラ
a=cikirikore a=tekekore a pokon an sikaymas²⁹ i=sirkinukar³⁰
脚を与えられ、手を与えられたかのような化け物が私をじっと見、

²⁵ hemanta は十勝ではあまり見られないようである。広野ハル氏は「何」は「nep」であり「hemánta イワナイ。」と言っている〔沢井・田村 2005: 34〕。【方言辞典】「なに」の項目では幌別、沙流で hemanta (nep も使用)、宗谷、樺太で hemata となっている。

²⁶ 「teksaykari〜を掴む。」〔八重九郎伝承 2〕索引: 134) ; 「teksaykari 【2 項動詞】用例数: 1 語構成: tek1-say-kari4〜を掴む」〔奥田語彙】144) ; 「テクサイカレ 【tek-saykare】 さっと取る、急いで取る、すばやく取る。」〔萱野辞典】321(510)〕。

²⁷ 「teshkosanu ぴんと反る。すべる様に行く、音もなく軽く迅き動作。(680)」〔久保寺辞典稿】272〕。

²⁸ 「うみき umiki (毛) 音がする ; kanna-kamui umiki (雷の音がして)」〔吉田語彙】81) ; 「humi kirok utar (もの音たてていた連中)」〔アイヌ民話 2】232) 。

²⁹ sikaymas<si-kaymas か。「カイマシ kaymasi 化け物」〔釧路語彙】98) ; 「kaymasike, 《ビホロ》 ばけもの。」〔人間篇】索引: 569) ; 「kaymaske 化け物。」〔八重伝承 6】索引: 117) 。

kaymasike は kamiasi(幌別、沙流、旭川), kameasi (沙流、名寄)、kamnasi (美幌) 〔方言辞典】172) に対応する語形だろう。kaymasike は kaymas 「化け物」-ike 「〜の方」だろうか。

「neppakaimasike (何の化物)」〔菊池クラ】139) 「ネプ カムナシケ (何か化物を)」〔菊池クラ】163) 。

³⁰ この後の toykonukar と対になっているとみれば、sirkonukar が期待される。

- 14607 トイコ ヌカルワアン ミナ クシュ ライ オカカパ ライオテシュ クルカシケ
toykonukar wa an mina kusu ray'okakapa ray'otesu³¹ kurkas(i)ke
ひどく見ていた。笑って前へかがみ、後ろへそりかえりながら、
- 14608 イタキ ハエエネアニ ネッパタアアン ポンルアンテク ヤイコシルエ アン=
[itak] hawe ene an i: — “neppataan pon ru an tek yaykosiruwe an
こう言った。「なんだ、小さいのがいて留守番をしている
- 14609 ベネヤ エレシュサポ クロンノアンナ。エエルシカツキ イタクイコテレケ
pe ne ya e=resu sapo ku=ronno³² an na. e=iruska ciki itak i=koterke
のか。お前の育ての姉は俺が殺した。怒ったなら俺に文句を言え (?)。
- 14610 ポンミナカイ ポンシノッポカイ アンキクンベネナ。イネノ ハウキ ヌ=
pon mina kay pon sinoppo³³ kay an=ki kunpe ne na³⁴.” eneno hawki nu
軽い笑いも軽い遊びも私はしてやるぞ。」 そういった声を聞くの
- 14611 ヲアナクネ ピリカ イヌネ アキテク マッコサムパアン。アコロイヌマ
anakne pirka inu ne a=ki tek makkosanpa=an³⁵. a=kor inuma
が良く聞こえて私はぱっと立ち上がった。私の宝壇、
- 14612 イヌマ・オシマク アンテク サイベ アサイカッタ アヌカルコ アネポン
inuma osmak an=teksay pe³⁶ a=saekatta³⁷ a=nukar ko anepon
宝壇の後ろで掴んだものを前へ出し (?)、見ると細く小さい (?)

³¹ 「mina kusu / chioesusu / chiokabapa, (笑うとて/後へそりかえり/前へこぼみ)」〔金成マツ『ユーカラ集』121〕; 「ミナクスチョテスス チョレウエウエ 抱腹絶倒。」〔【萱野辞典】426〕などの常套句が沙流方言のテキストに散見される。オカカパとなっているが okapapa の可能性がある。

³² 十勝(帯広・本別)では「殺す」は ronno で、他方言に見られる単数形の rayke に対応するものは見られない〔【方言辞典】29, 【十勝語彙】〕。広野ハル氏によれば「殺す」は ronno で、ronnu, ráyke は「イワナイ」〔【広野語彙】81〕。

³³ pon~kay, pon~kay という対句となっていると考え、sinot pokay ではなく、sinoppo < sinot 「遊び」-po 「指小辞」とした。

³⁴ 化け物のセリフだろうか。「笑って遊んでやるよ」くらいの意味か?

³⁵ makkosanpa < matkosanpa. 単数形は makkosanu なのでそれとの対応からムは-n にしてある。

³⁶ an=teksay pe としたが、teksay だけでは意味を成さないかもしれない。ここでは teksaykari (teksaykare)の意味と解釈した。

³⁷ 「sa-ekatta だつと前へ出る ぐつと前へ出す」〔【久保寺辞典稿】232〕。

- 14701 アサイカッタ アピタピタ オシケワ アサッペ アヌカラ アイケ アミノ
 a=saekatta a=pitapita oske wa a=sappe³⁸ a=nukar ayke a=mino³⁹
 前へ出し、ほどいて、中から取り出し私が見ると大きさがびつたり of (?)
- 14702 カオカイ ポンチムッペ ポンアヨクベ ポンカサ アサブテアン ネナアヨ
 ka okay pon cimuppe⁴⁰ pon ayokpe⁴¹ pon kasa a=sapte an nena(neya?) ayokpe
 もある小さな刀、小さな鎧、小さな笠を私は出して、その鎧を
- 14703 クベ アニヨッ アニイヨ カニポンカサ アネパチュイ イロロンワ イワン
 an=e(y)ok⁴² [an=eayok]⁴³ kani pon kasa an=epacuy⁴⁴ eroronwa iwan
 よろい、金の小笠をかぶり、上座から何度も
- 14704 ・シュイ エウサルンネ イワン・シュイ トウエン チニカ レウン⁴⁵ チニカ⁴⁶
 suy eusarunne⁴⁷ iwan suy tu wen cinika⁴⁸ re [wen] cinika
 下座の方へ何度も二つの烈しい足踏、三つの烈しい足踏を

³⁸ sapte だろうか。

³⁹ a-mi-no < a 「人が」 -mi 「～を着る」 -no 「よく」。大きさがびつたり of という意味だろうか？

⁴⁰ cimuppe < cimutpe. 【八重伝承 3～5】でも cimuppe という語形が確認できる。

⁴¹ ayokpe < hayokpe

⁴² 「eok 【2 項動詞】用例数: 10 ～に引かかる」【【奥田語彙】 23】。

⁴³ eayok < ehayok 「(よろいを) 着る」だろうか。カタカナと乖離があるので違うかもしれない。

⁴⁴ e-pa-cuy < e 「～で」 pa 「頭」 cuy 「～を刺す」だろう。「epaciwre ～を頭にかぶる。」【【八重伝承 4】 索引: 122】。

⁴⁵ tu～ re～という対句になっているので、「レウン」も「レエン」を意図したのだと思われる。トゥワン～レワン～「20 の～30 の～」の可能性もある。

⁴⁶ 「moshiriso kata / niwen chinika / ikoturi (国土の上に/烈しい力足を/我に延ばし)」〔鍋沢ワカルパ【ユーカラ集 9】 185〕。参考: 「ape hekote / tu niwen toyru / ukakuspare (炉の方へ/あまた激しい足踏みを/かさね)」〔鍋沢ワカルパ【ユーカラ集 9】: 338〕とあり、cinika は toyru と同じように使われるらしい。「『力足を踏む』、原語チニカ・コトゥリ。芝居のろっぽうのように、足どり高く、『大股を踏みさくむ』こと。手には、男子なら悪心を払う太刀を、女子なら手草などを持って、口に呪文を誦して烈しく息吹をなしつつ行進する。いわゆるケウエホムシュ『氣勢を添える儀式』。」〔金田一 1993[1943]: 477〕。

⁴⁷ 「e'úsarun [副詞] 下座へ」〔切替 1996: 189〕。ここでも eusarunne 全体で「下座へ」と解釈しておく。14601 では「イウサルン エネ」となっている。

⁴⁸ 「chinika 足踏 chinika koturi 大股をふみさしむ kewehomshu の時の足どり niwen ～ aekoturi 猛き足踏をわれ踏み延べる < chin (脚) ika (またぐ、また)」【【久保寺辞典稿】 44】；「Chinika、チニカ、一步、脚。例セバ、チニカブニ、一步ヲ進メル. n. A step. The legs.」【【パチエラー辞典】 81】

- 14705 アノカクシテ トウイカシケ アニイタク コハウ イネオカイ ケライボ
an=ukakuste⁴⁹ tuykas(i)ke an=eytak kohaw ene okay i :— keraypo
重ねながら、私はこのように言った。「そのおかげで
- 14706 アンラムシュ⁵⁰ イレシュサポ アンカムイサポ ネアイケ ネコンネウ ハウ
an=ramus(?) iresu sapo an=kamuysapo ne ayke nekon ne haw
私が物心が付いたのが育ての姉、神なる姉であるが、どうしたことで
- 14707 イネアニワ アンコロミチシ アンコロトット オカイアツキ ノミカムイ
ene an i wa an=kor micihi(?) an=kor tutto okay a ciki nomi kamuy
あって、私の父と母がいたならば、祈った神々が
- 14708 オカイアン ナンコンナ。ネコンナポカイ イカオチャシカワ イコレナンコ=
okay an⁵¹ nankor_ na. nekonna⁵² pokay i=kaocaska wa i=kore nankor.”
たくさんいらっしゃるでしょう。何とか私を助けさせてください」
- 14709 ロ アネハウ アナイケ アンコロコタン コタンイトコワ カムイニシ チ=
ani haw⁵³=an ayke an=kor kotan, kotan etoko wa kamuynis
と言うと、私の村、村の山手から神雲が
- 14710 ホブニレ アコロチセ チセ・エンカ シリ・エクロクワ エク ネヤカシケ=
cihopunire a=kor cise cise enka sir'ekurok ek neya kas(i)ke
立ち昇り、私の家、家の上が真っ暗になってきて、その上に

⁴⁹ ここは、ローマ字化に際して o を u に書き換えた。tu wen cinika re wen cinika ukakuste で「何
度も烈しい足踏みを重ねる」という常套句となっている。

⁵⁰ ラムシュという表記からは ramusu, ramus の可能性が考えられるが、ram 「心」-us 「〜につく」
だろうか。参考：「Ram-ush, 学者, 賢人. adv. Learned. Wise.」【パッチェラー辞典】412】。

⁵¹ 他方言の okay wa an に相当する形だろうか。山本氏の著作では「ウサ・モシリ・オカイアン・ク
ルウタラ (色々な国にいる人々)」(07604~05) などのようによく見られる表現である。敬意を表す
表現なのかもしれない。

⁵² 「nekonna (adv) 如何に <nekon+na」【久保寺辞典稿】166】。nekon の異形態と考えてよい
だろう。

⁵³ hawki, awki が期待される場所である。

- 14711 タ シンダァ ラッキ ポコン ヤイヌアン ヤイコニエン ヤイコシンネ
 ta sinta⁵⁴ rakki⁵⁵ pokon yaynu=an yaykoniwen⁵⁶ yaykosinne⁵⁷
 飛行船が下りてくるように思った。不満足で一人で (?)
- 14712 エトウポクカリ ソオシマアン アコロコタン コタントゥラス チカプ オマン
 etupok kari soosma=an⁵⁸. a=kor kotan kotan turasi cikap oman
 煙り出しの窓から私は外に出た。私の村、その村に沿って鳥が飛んでいく
- 14801 ルイ カトゥ イカンナユカラ アンキ リイワアン ニテク ニテク チョロポク
 ruy katu ekannayukar an=ki ri wa an nitek nitek corpok
 かのようにして高い枝は枝の下を
- 14802 アンクス ラムアン ニテク ニテク エンカ アンクス キワ チカプ オマ=
 an=kus ram an nitek nitek enka an=kus ki wa cikap oman
 くぐり、低い枝は枝の上を通過して鳥が行く
- 14803 ン アネ イカンナユカラ イセトゥルカス イキヤ アホマプ エンベサニ
 ane(?) ekannayukar i=seturu kasi ikiya⁵⁹ ahomap⁶⁰ wenpe sani
 ???かのように私の背中の上をその化け物、悪い奴の子孫が
- 14804 オユプワ エクコラン パアイェ・アイネ アコロコタン コタン・エトコ ネ
 oyupu⁶¹ wa ek kor an paye ayne a=kor kotan kotan etoko ne⁶²
 走って来ている。進んで行くと私の村、その村の山手に

⁵⁴ 「sinta は赤ん坊を乗せてあやす『ゆりかご』であるが、伝説の中では空飛ぶ乗物をやはりシントと呼ぶ。」(稲田監修・浅井亨 1972: 93)

⁵⁵ rakki < ratki. rakki は【八重伝承 3~5】にも見られる。

⁵⁶ 「Yaikoniwen, 不満足. adj. Dissatisfied. Grumbling.」【バチエラー辞典】564】。

⁵⁷ 「yaykosine 一人である?」【八重伝承 1】索引: 132】と関係があるだろうか。

⁵⁸ 「etúpok [名詞] 煙出しのための空窓」(切替 1996: 189) 「etupok kari so'osma 煙り出しの窓から外に飛び出ていった。」(切替 1996: 151)。

⁵⁹ iki(y)a に関しては高橋 (2011) が詳しい。

⁶⁰ 「あほまぶ ahomap (音) 馬鹿者; a-homap! (この馬鹿者め) 罵る詞」【吉田語彙】46】。

⁶¹ oyupu < hoyupu

⁶² 向格助詞だと思われるが、後ろの動詞の kosirepa の ko- が同じ機能を果たすので文法的には無いほうが自然だと思われる。

- 14805 アコシレバ オヤエクベツベツ オントム アニコオマンデ ベテソロ サブ
 a=kosirepa oya ek⁶³ pet pet ontom⁶⁴ an=i=koomante⁶⁵ pet esoro sap=an⁶⁶
 私が着くと、ほかのところからくる川(？)、その川の途中に送られ、川に沿って下ると
- 14806 アナイケ トゥレプ タアアン タネポ カネ キヤ インカラ アンクシュ ハイ=
 ayke turepta aan tanepo kane ki ya inkar=an kusu⁶⁷ hai
 今、ウバユリ掘りをしているのかと見たところ、ああ
- 14807 タア クヤイヌ ハイタァ サンベ トゥレプタ ウシケダ イレシュサポ カムイ
 ta ku=yaynu hai ta sampe turepta us(i)ke ta iresu sapo kamuy
 なんとということだ、ああ心臓が痛む、ウバユリを掘るところで育ての姉が、
- 14808 コロサポ アンミレキワ カッケマツ ホッケクニ オッカシケダ アホッケレ
 korsapo an=mire ki wa katkemat hokke⁶⁸ kuni okkas(i)ke⁶⁹ ta a=hokkere
 神なる姉(が死んでいて)、着物を着せて婦人が寝る以上に(着物を着せて)私が寝かせ
- 14809 イキヤ イコンノプ⁷⁰ アンコシキル イネピタキ⁷¹ アンコロ ピリカプ ライ・
 ikiya ikonnop an=kosikiru ene p itak i : — "an=kor pirkap ray
 その化け物の方を向いてこういった。「私の大切な人が死んで

⁶³ 川は下から上にのぼる。(知里真志保)

⁶⁴ ontom<hontom

⁶⁵ a=kooman と同じような意味だろうか。それとも自分以外の何かによって運ばれているということだろうか。

⁶⁶ 別の川筋におりていったということだろうか。

⁶⁷ 理由と考えると文脈に合わないので akus(u)などのように「～すると」と解釈した。

⁶⁸ すぐ後に「ホッケレ」とあるので hokke とした。沢井トメノ氏の言葉でも hotke ではなく hokke である〔切替 1998b: 349〕。

⁶⁹ 似たような例に「kamuy osura kuni okkaske ta a=kor ekasi a=onnere (神様を送るよりももつと立派に、私たちはおじいさんを見送りました)」〔【音声資料 10】134〕がある。

⁷⁰ 「ikonnū, 《ホロベツ, ビホロ》予兆する; 前兆となる; 予兆で人に知らせる。nep ka e~何かについて予め告げしらせる。」「【人間篇】索引: 560)とあり、ikonnup という語形かもしれない。

⁷¹ イネピタキは ene p itak i であろうが、ene itak i に p が挿入される例は四宅ヤエ氏、八重九郎氏にも見られる。切替 (2004: 20) では山本多助氏の「イネピ イタクキ」を ene itak i だとし、enep itak i を誤りだとしている。本稿の「5. 『サコロベ』の言語的特徴」を参照。

- 14810 ネワ クシュ エキルル アン⁷²ネチキ アネエカラカラ アンナ。インカ ネイ＝
ne wa kusu e=kiruruan ne ciki ane(?) e=ekarkar=an⁷³ na. inkaneypeka
お前は喜んでるのなら俺はお前に（仕返しを）するぞ。決して
- 14811 ベカ⁷⁴ エコイルシカ コトンアンナ⁷⁵ ハウキアン・カネ イキヤ エンベ
i=koyruska koton an na” hawki=an⁷⁶ kane ikiya wenpe
俺に腹を立てるんじゃないぞ」（と）私は言って、その悪い奴、
- 14812 イキヤ アホマブ アコテケテレケ アタメコイキ ウタメコイキアン マカナ＝
ikiya ahomap a=kotekterke⁷⁷ a=tamekoyki utamekoyki=an makananta⁷⁸
その化け物にとびかかった。私が刀で切りつけ、お互いに切りつけあった。ある時は
- 14901 ンダ アンコロ・イムス アネヤプキリ ウコテレケ アンワ ウニツレイバ
an=kor emus an=eyapkir ukoterke=an wa unitreypa⁷⁹
刀を投げて取っ組み合って素手で勝負している（？）
- 14902 ウトゥルダ エムス アコ イクシキ⁸⁰ ウタメコイキ アンナ。キアイネ タネ
uturu ta emus a=koykuske utamekoyki=an na. ki ayne tane
その間に刀を手にとり、斬りあった。そうするうちに今や

⁷² e=kiroroan かもしれない。

⁷³ 15108 にも似た場面で「エカラカラアン」が出現する。この前にある「アネ」は何か分からない。

⁷⁴ inkaneypeka は八重九郎氏の伝承にも出てくる [【八重伝承 4～7】]；「ikineypeka 【副】 [iki-ney-péka どんな...でも・どこ・で](?) [雅](禁止の言い方の一つ。)けっして(...してはいけない。)」 [【田村辞典】 223]；「ikánepeka [副詞] (禁止) ikaneypeka wen kewtum ‘eci kon na.決して悪い心を抱くな」 [切替 1966: 198] 「ikaneypeka a-yupi neankur i-eramasuy an tek a-yupi e se na (絶対に兄さんがその人から私を欲しいとなっても兄さんが返事しなければなあ)」 [【アイヌ民話 2】 201]。

⁷⁵ 後の部分でほぼ同じ表現の「インカネイベカ イコイルシカ コトンアンナ」(15108-15109) と言うのがあり、ここのエコイルシカも意味的により適当なイコイルシカと解釈した。

⁷⁶ 梗概では私が姉に言ったことになっているが、私が悪者に言ったセリフだろう。

⁷⁷ 語構成から見ても kotetterke の可能性が高いが、文字通り kotekterke にした。「kotetterke 【2項動詞】 用例数: 19 語構成: ko2-ter!-terke ～に飛びつく」 [【奥田語彙】 73]。

⁷⁸ 「Makananda adv. Sometimes. See Makan ne koro. As :-Makananda an, makananda isam, "sometimes there is and sometimes there is not."」 [【バチェラー辞典】 289]。

⁷⁹ 語形はカタカナを転写しただけであり、この語形が他の資料で確認されているわけではない。語義にかんしても不明である。ここでは前の場面で刀を投げ、その後でまた刀を手にとっていたので、「素手で勝負する」と解釈した。

⁸⁰ 「koykuske (太刀) を手に取る (？) [【八重伝承 4】 126]。ipetam koykuske (太刀を取り) の用例のみ。

- 14903 アナクネ アネケンレイ ケンレイカス アノハイダ ヤイヌアン。ヘマンダ
 anakne ane ken ruy⁸¹ ken ruy kasi/kasu an=ohayta⁸² yaynu=an. hemanta
 細い血の筋、その血の筋を避け（ようと）思った。何かの
- 14904 レラ イコイカリ フッセチュイカリ コトン ヤイヌアン。カンナシュイ ウコ＝
 rera i=koykari⁸³ hussecuykari⁸⁴ koton yaynu=an. kanna suy ukoterke
 風が私に吹き付け、巫術の息をかけられたように思った。また跳ね合った。
- 14905 テレケ カンナシュイ オホンノネヤ イルカイネヤ モコロアン アンナ。
 kanna suy ohonno ne ya irukay ne ya mokor=an an na.
 もう一度、長いことであったか短いことであったか、眠っていた。
- 14906 アンシキ アンマカワ インカラ アンクシュ イキヤ エンベ エノンテレケ
 an=siki an=maka wa inkar=an kusu ikiya wenpe enon terke
 目を開けて目をやるとその悪い奴はどこかへ跳ねていった
- 14907 ネヤ エノンオマン ネヤ アネラメベテク オッタ アモンモイ アイネ
 ne ya enon oman neya an=eram(e)petek⁸⁵ otta a=mommoy(moymoy?) ayne
 のか、どこへ行ったのか分からなかった。その時に私は体を動かすと

⁸¹ kem ruy 血の筋？「血がどっと出る kem 'oasin ruy」〔八雲【方言辞典】20〕。

⁸² ken ruy を kem ru(y)として解釈したが、ケンレイは「kenru n 家 <大黒柱」〔【久保寺辞典稿】125〕で、取っ組み合って柱に頭をぶつけて倒すときの表現である可能性もある。ohayta も uhayta かもしれない。

⁸³ 「koikari v 逢ふ、ぶつつかる、衝突する。(739)」〔【久保寺辞典稿】135〕

⁸⁴ 「hussecuy 巫術の息をかける。」〔【八重伝承 6,7】索引〕；「use echui フキツケル」〔【菊池クラ】153〕

。「tu pase husse / kurkasike / ahusse ehiw(ママ) (数々の大息吹を／彼の上に／ぴゅうぴゅう掛ける)」〔【アイヌ叙事詩】395〕；「3550 tumam sirikasi / 3551 ahusse eciw」(ワカルパ 9-2) ※白糠・釧路・美幌などの道東方言で他方言の iw が uy に対応する (例: nuykes - niwkes) が十勝の帯広・本別では niwkes である。

⁸⁵ 「エラムペテク」の誤記だろうか？管見の限り eramepetek という語は確認できていない。参考：旭川や名寄で「知らない」を erames(i)kari と言う 〔【方言辞典】160〕。

- 14908 タプネ アンアイネ ナナッポ アネカネユッケ リムンセ アリッナップニ
 tapne an ayne nanappo⁸⁶ anakane yupke rimunse⁸⁷ a=riknapun
 こうしているうちに、まるで(?)、強い叫び声をを天に向かってあげて
- 14909 ネプ レラシュイ イレラカリ ポコン ヤイヌアンテク アフンコカタ アンオ=
 nep rerasuy⁸⁸ i=rerakare pokon yaynu=an tek ahunko ka ta an=osipi
 何かのつむじ風が当たったように私は思って、???に戻って
- 14910 シピ マッコサヌ アンワ オロワノ コタン・エトコ コオユブ イネウン・
 makkosanu=an wa orowano kotan etoko kooyupu⁸⁹ ine un
 ぱっと立ち上がって、それから村の入り口に走って、どこの
- 14911 コタン イネウン・モシリ ネヤ アトゥイトウイサン アネオチャシテ アイネ
 kotan ine un mosir ne ya atuy tuysan⁹⁰ an=i=ocaste⁹¹ ayne
 村、どこの土地であるのか海のそばに私は走らされたあげく(?)
- 14912 シポロ トウカシケ オテレケアン ピリカ パラルコオマンル コンナ
 siporo to kas(i)ke oterke=an pirka pararu kooman ru konna
 本当に大きな湖に飛んで行って美しい道が伸びている(?)様は
- 15001 テスナタラ オユッパ アイネ・インカラ アンクシュ カムイチセネ クシュ ア=
 tesnatara oyuppa⁹² ayne inkar=an kusu kamuy cise ne kusu
 スラリとしていて走って行って目をやると、神の家であるから

⁸⁶ 「なーなぶぼ nanappo (伏) まるで」【吉田語彙】104】。

⁸⁷ 文字通り rimunse としたが、これは rimse に相当するものではなく、rimimse に相当する語彙だろう。似た例に「アンコッサポ/エアン リミムセ/eriknapuni kusu/イヌアナクス (私の姉が/叫び声を/天に向かってあげたので/聞いたところ)」【菊池クラ】134】がある。

⁸⁸ 沢井トメノ氏は「つむじ風」を rérasuy としており、「sírhontom wanó 'ekúskonna 出てきて、強くぶつかってくるんだもの、人間にでも」とせつめいしている。また「ekuskonna rera suy ene ek pokon ekuskonna rera yupke hum an. 突然、竜巻でも来るかのように、急に風がはげしくなりました。」【高橋編 2014: 43】という例文もある。

⁸⁹ kooyupu < kohoyupu

⁹⁰ tuysan < tuysam

⁹¹ ani=i=~te という表現は 14805 にも出てくる。韻文的な表現かもしれない。

⁹² oyuppa(oyupu の複数形) < hoyuppa

- 15002 ルコトムカ カニネチセ カニチセ ウエロロシキ ルアンアンノシキ タブネ
arkotomka⁹³ kani ne cise kani cise ueroroski⁹⁴ ru an annoski tapne
荘厳な金である家、金の家立ち並んでいる。真夜中に (?)
- 15003 イナ アベヌベキ チカリタラ ヘンダアンベ ユッケ テムキハウアシ。
ina apenupeki⁹⁵ cikaritarara⁹⁶ hentaanpe yupke temuki⁹⁷ haw as.
もっと (?) 火の明りが輝いている (?) 何かがはげしい唸り声をあげている。
- 15004 ネイケ アパ オマブ ネルイネヤ イラムシカレ イトモンピヤラ アシベ=
neyke apa oma p ne ruy ne ya eramuskare itomonpiyar⁹⁸ as pe
戸口から入るものなのかも分からず、横窓に立って (?)
- 15005 カリ インカラクシュ タンチセノシキノカタ イキヤ・エンベ ソノシキダ
kari inkar kusu⁹⁹ tan cise noskiso ka ta ikiya wenpe sonoski ta
そこから見ると、この家の真ん中の座にかの悪者が座の真ん中に
- 15006 クットコアンワ アンコロ・イムス エウスカナンワ オカイアン。ネヤ
kuttoko an wa an=kor emus eus kan an wa okay an. neya
仰向けになっていて私の刀が刺さっている。その
- 15007 シソオッタ レタラペウシエカシ レタラペウシフチ イウサラレワ アン。
siso otta retarpe us ekasi retarpe us huci eusarare wa an.
上座に白髪のエカシが、白髪のフチが下座に座っていた (?)

⁹³ 「Arakotomka v.t. To ornament one's self.」 [【バチエラー辞典】 48]。

⁹⁴ 「uororoski ～を揃える。」 [【八重伝承 5】 索引: 112]。15207 ではウオルロシキとあるので、uororoski を意図していた可能性が高い。

⁹⁵ 「光」を表す語彙として八雲・幌別・帯広・美幌では nupek,-i が用いられるが、nipek,-i 系は沙流・旭川・名寄(以上、nipek,-i)・宗谷(nikep,-ihi)・樺太(nikeh, pihi)で用いられる。

⁹⁶ 「cikaritarara 整列する(?)。」 [【八重伝承 5,6】 索引]。

⁹⁷ 「Temuki v.i. To groan.」 [【バチエラー辞典】 497]。

⁹⁸ itomon- という語形は確認できていない。「ひかり (光り) を受ける窓 itomunpuyar」 [【十勝分類】 108] 「itomunpuyar (横窓)」 [小鳥サワ、高橋 2002: 189-190] ; 「piyar,-i 【シヤリ】 窓。」 [【地名小辞典】 160] ; 「piyar 窓」 [『八重九郎の伝承 1』 索引 131] ; 「piyár」 [名寄 【方言辞典】 103]。なお、伏古コタンのチセの聞き取りをした内田 (1988) では itomunpuyar の語は見られない

⁹⁹ インカラクシュは inkar akusu と inkar akusu の二つの可能性があるが、山本氏の筆記ではこれまで inkar kusu で「見ると」の意味を表している。

- 15008 アソケタ カムイポンメノコ チスノイエカニ オカイ。イキヤ エンベ イネ
 asoke ta¹⁰⁰ kamuy pon menoko cisnoye¹⁰¹ kane okay. ikiya wenpe ene
 その向かいには神なる娘が身悶えして泣いている。例の悪いやつは
- 15009 ハウキ。アンコロ トウレス タアン エムス エンコタカニ イタエワ エン=
 hawki (i) : — "an=kor tures taan emus enkota kane etaye wa en=kore"
 こう言った。「我が妹よ、この刀を早く抜いてくれ！」
- 15010 コレ アニノ ハウアシ。コロカイ ポンメノコ ソモ イヌブ コトンアン
 anino haw'as¹⁰². korkay pon menoko somo inu p koton¹⁰³ an
 と声をあげたけれども、その娘はそ知らぬ様子だった。
- 15011 オロダ チセコロエカシ イネハラス スタイネアンワ ネクシュ エテッケ¹⁰⁴
 oro ta cisekor ekasi ene hawas (i)¹⁰⁵ : — "sutaynean wa ne kusu etekke
 そこに (?) 家の主人がこう言った。「???であるので決して
- 15012 エン・ケイトウムコロ オタシュウンクル アナクネ アイヌ ヤクカイ カムイ
 wen keytum¹⁰⁶ kor Otasut'unkur anakne aynu ne yakkay kamuy
 悪い心を持つな。『オタシュウンクルは人間であっても神の

¹⁰⁰ arsoke ta, assoke ta 「～の向かい側」と同じだろうか。このテキストでは他の記録で ss とあるものが s で表記される傾向がある (15410 ウソロシケ us[s]or oske)。

¹⁰¹ チシノイエ 「身悶えして泣く」〔黒川きよ『神話集成 2』41〕；「tusui chishnoye / resui chishnoye / semkorachi / iki kane (二たび泣き死に／三たび泣き死に／せんばかりに／して)」〔【ユーカラ集 6】352〕。

¹⁰² 元の形は haweas だったかもしれない。「hawéas [自動] ～が声をあげる」〔切替 1996: 48〕。

¹⁰³ koton < kotom

¹⁰⁴ 15212 ではイテッケという表記があり、itekke を意図しているのかもしれない。これまでのアイヌ語の記録からは itekke は帯広・本別・静内・八雲などで確認されている〔【方言辞典】ほか〕。etekke は【方言辞典】の美幌方言の項目や、山本多助氏のアイヌ語に見られる。釧路の徹辺重次郎氏は etékke である〔北原ほか編 2003〕。

¹⁰⁵ 切替 (2004: 17) 参照。

¹⁰⁶ keytum は沢井トメノ氏の言葉に見られないようだが、広野ハル氏の言葉には見られる (沢井・田村(2005:314)では「kewtum デナイ。kéytum」と言う記載がある)。この形式は美幌・釧路・白糠でよく見られる。

- 15101 シンネ アコシラム シュイ ウタリ シタブ オカイネ ハウキアンカネ アネイエ
sinne akosiramsuy[e]¹⁰⁷ utari sitap¹⁰⁸ okay ne” hawki=an kane an=e=ye(?)
ように尊ばれるお方なのだ』(と) 私は言いながらお前に言った
- 15102 ヤクカイ ソモ イヌノ イキヤ エンケイトウムコロ タネ ネコン ネヤ
yakkay somo inu no ikiya wen keytum kor tane nekon ne ya
けれども、それを聞かずにその悪い心を持った。今やどうにかして
- 15103 タエン オカケ ピリカ クニ エイサンノ イキヤ チセコロ エカシ イネ=
tan¹⁰⁹ okake pirka kuni e=esanno¹¹⁰ ikiya cisekor ekasi ene
今後良くなるように考えなさい」(と) その家の主人はそう
- 15104 ハウ キカネ イルシカアン。ピリカ インカラ アンキテク エトウポクカ=
hawki kane iruska an. pirkainkar=an ki¹¹¹ tek etupok kari
言いながら怒っていた。私はじっくり見て煙り出しの穴から
- 15105 リ レラシュイ コラチ イキアンカネ アフアアン。アアチキリ トウアン
rerasuy¹¹² koraci iki=an kane ahup=an. a=a[t]cikiri¹¹³ tuan¹¹⁴
つむじ風のようにして入った。片方の足を向こうの

¹⁰⁷ akosiramsuye<a-「人が」-ko「～に」si「自分の」ram「心」suye「～をゆらす」だろうか。

¹⁰⁸ 「したぶ shitap (伏) にて ; hushikopet ari ahe(ママ) kotan shitap an ne (伏古男という村である)」【吉田語彙】110。語形は違うが「nesi, tasi, esi, si は普通文尾を ne で結ぶ」〔知里 1973[1942]: 584〕というようにここでも文尾は ne となっている。

¹⁰⁹ タアンではなくタエンと書かれてあるので、tan としておいた。

¹¹⁰ sanniyō「すべきことを考える」だろうか。

¹¹¹ pirkamokor=an などがあるのでこう解釈したが、pirka inkar an=ki「よく見ることを私はした」の可能性もある。

¹¹² 「rerasuye【自動】[réra-suye 風(が)・...をゆらす] 風にゆらされる。」【田村辞典】575】。

¹¹³ 15008 等とともに -ss, -tci が -s, -ci と書かれている。次の行ではアッチキリという形で出ている。

¹¹⁴ 「そちらへ」は「tu'ánen」(帯広)「tu'anene (遠く離れた所)」(美幌)【方言辞典】312「あそこに家がある tuánta cisé 'as.」(徹辺重次郎)〔北原ほか編 2002: 251〕。

- 15106 イヌンベ アッチキリ テイアン イヌンベ カシケタ アナシ ラッキ シュアッ
 inunpe atcikiri¹¹⁵ tey an¹¹⁶ inunpe kas(i)ke ta an=asi¹¹⁷ rakki¹¹⁸ suat¹¹⁹
 炉縁に、片方の足をこちらの炉縁に立てた。下がった炉鉤(?)
- 15107 オロワ カリアン トウイカ イタキアン ハエ アンコロ ピリカッペ ライネ
 orwa kari=an tuyka itak=an hawe "an=kor pirkappe ray ne
 のところにぶら下がりながら(?) 私はこう言った。「私の大切な人が死んだ
- 15108 ワ クシュ タアン カッチャマ アンマクシュ エカラカラ アンナ。インカネイ=
 wa kusu taan katcama an w_a kusu e=karkar=an na. inkaneypeka
 のでこの(悪い)心があるので、お前に(仕返しを)してやるぞ。絶対に
- 15109 ベカ イコイルシカ コトンアンナ ハウキ アンテク アンコロ・エムス
 i=koyruska koton an na" hawki=an tek an=kor emus
 俺に腹を立てるんじゃないぞ」(と)言って、自らの刀を
- 15110 アネタイテクカ イキヤ エンペ アンレクッ アトウイテクカ チャチャ ウルメツ=
 an=etay(e)tekka¹²⁰ ikiya wenpe an=rekut- a=tuy(e)tekka caca urumekkur¹²¹
 サッと抜いて、かの悪者の首を切り落とした。老翁夫婦の

¹¹⁵ アアッチキリを意図したのだとおもわれるが人称がない。

¹¹⁶ 「こちらへ」は「te'en」(帯広)「teyne ;'enokota 《私のほうへ》」(美幌)【方言辞典】311。参考: 徹辺重次郎氏の表現に以下のようなものがある。「ここに座る ténta á.」「ここが一番いい téyro pírka.」「そこ寒いからこっち来なさい teykiro méan na téyne ék.」[北原ほか編 2002: 276]「こっちがいい teéro pírka.」[同: 301]。

¹¹⁷ 参考: 「a=atickiri/an=oyausia=atickiri/an=orepusi 片足を陸に立て、片足を沖に立て(家のことをきづかいながら海に舟を出す時の常套句) [N9309281.KY]」【中川辞典】11。

¹¹⁸ rakki<ratki

¹¹⁹ 山本(1973: 8-9)に鍋鉾は「シュアッ」で、鍋かぎは「シュニ」とある。沢井トメノ氏によると、炉鉤は suwat で、炉鉤の縄は suwat at だという【十勝分類】103。

¹²⁰ 「ミコト アナクネ コロタム エタイエ テクカワ (ミコトは持っている刀を抜くと?)」【アイヌモシリ】364。「etaytektek 【他動】 [etay(e)-tektek ...を引く・瞬間にサッと(キュッと)]...をキュッと/サッと引き抜く。tasiro etaytektek wa (彼は)山刀をサッと抜いて。」【田村辞典】131。

¹²¹ 「urumek [u-ru-mek ウルメク]《クツシャロ》夫婦である; 夫婦になる。[umurek の metathesis (音位転換)]。」「【人間篇】517; うるめくる urumek-kuru (白)夫婦。」【吉田語彙】121; 「夫婦 'urumekkur (美幌)」【方言辞典】45。

- 15111 クル アレクッ チヤクカ インカラアंकシュ イキヤ トウレスネ ポンマツ
a=rekutcakka(?)¹²² inkar=an kusu ikiya tures ne pon mat(maci)
首も斬った(?)。見ると、かの妹である少女は
- 15112 ウサロンワノ ソオシマアンテク トウノシキ アヤイコチャシテ ナイコラツ=
usaron wano soosma an tek tonoski a=yaykocaste nay koraci¹²³
下座の方から外へ出て行った。湖の真ん中へ私は走っていき(?)、やっとのことで(?)
- 15201 アン チセオロバ タンダアロンノ アンベ アキネクシュ ウネッコノアン
an cise or opa[ye?] tanta a=ronno an pe aki¹²⁴ ne kusu unekkono an
家へ行った(?)。ここで私が殺したものはその弟であるので似ている(?)
- 15202 チャチャ ウルメックル オカイ モシマ トウシクツプクル アンワ シネネ アン
caca urumekkur okay mosma tu sikupkur¹²⁵ an wa sinene¹²⁶ an
老翁夫婦がいた。ほかに二人青年がいて、ひとり
- 15203 クル アナク アン アッカリカイ パアン クル ネテク シネン アナク
kur anak an=akkari¹²⁷ kay pa an kur ne tek sinen anak
私より年のいった人であって、もう一人は
- 15204 イパ ネッコノアン トウシクプ・クル アン エトウボクカリ レラシュイネ アフ=
i=pa nekkono an tu sikupkur an etupok kari rerasuy ne ahun=an.
私の年と同じくらいである。二人の青年がいる。煙出しの穴からつむじ風となって入った。

¹²² 15401にも「レクツ トウイ レクチ チヤクカ」という対句表現が出ており、「チヤクカ」はトウイ tuy(e)と同じような意味だと考えられる。cakka だろうか。

¹²³ koraci an 「~のようである」? 「ライコラチ 【ray koraci】 死ぬ思いで、やっとの思いで、ようやくのこと。」【萱野辞典】457]; 「rai korachi やうやく、やつと。辛うじて、やつと」【久保寺辞典稿】216]; 「Rai-korachi, adv. Hardly. With difficulty. Like one dead.」【バチェラー辞典】406】。

¹²⁴ これは前の場面で殺された老翁(夫婦)のことか。

¹²⁵ 若者(青年): sikupkur(30歳位)(美幌)、sikupkur(帯広)【方言辞典】35】。

¹²⁶ sine[n]ne は「ひとりで」だが、ここでは二人の青年を一人ずつ説明している場面なので、「一人」とした。

¹²⁷ i=akkari とはなっていないが「私より」という意味だろう。

- 15205 ンアン。イキロクペ オブッタ レクチ アトゥイパ アンワ シュイ ソオシマ
 ikirok¹²⁸pe oputta rekuci a=tuypa an wa suy soosma=an.
 そいつら全員の首を斬って、また外に出た。
- 15206 アン。トウケス オレニ オイプワ インカラ アンクシュ アンコラツ シポ=
 tokes oren(e) [oyupu] wa inkar=an kusu an koraci siporo
 湖の端に行ってみると、以前のとおり(?)とても大きな
- 15207 ロカニチセ ウオルロシキ ピヤラ オロ アフン アンキワ オブッタ レク=
 kani cise uorurosiki¹²⁹ piyar or ahun=an ki wa oputta rekut(rekuci)
 金の家が並んでいて、窓から入ってみんなの首を
- 15208 ッ¹³⁰ トウイワ アロンノワ ソオシマ オッタ ネンネ ハウネルイネヤ イオ=
 tuy[e] wa a=ronno wa soosma otta nenne haw ne ruy ne ya i=oskeosma(?)
 斬って殺して外に出る時に誰の声であるのか、私の元に届いた(?)。
- 15209 シケ¹³¹オシマ イシリ克蘭デ オタシュッウンアンカムイ アキ タンベパクノ
 “isirkurante Otasut un an=kamuy’aki¹³² tanpe pakno
 「恐ろしいことだ。オタシュツの神なる弟よ、
- 15210 ネコンアン アクカイ アン イラムスカレノ オカイアニケ トウコタン
 nekon an akkay¹³³ an=eramuskare no okay=an ike tu kotan
 どんなことがあっても私(たち)は知らないでいて、二つの村の系統

¹²⁸ iki(y)a の複数形。

¹²⁹ 「uororoski ～を揃える」【八重伝承5】索引:112。「カニ イタ/カニ イタンキ/ウオロロシキ (金の盆/金の御椀を/並べ)」【菊池クラ】165。15002 ではウエロロシキとなっている。

¹³⁰ 「レクツ」かもしれない。レクツであれば rekuci と解釈できる。

¹³¹ 「おしき oshiki (伏) 家の中」【吉田語彙】54。

¹³² こう呼びかける人物は後に出てくるシヌタブカの兄だろうか。

¹³³ akkay < yakkay

- 15211 イキリ レコタン イキリ アイヌ オプッタ ウライケシリ イシトマカ
 ikir¹³⁴ re kotan ikir aynu oputta urayke siri isitomaka¹³⁵
 三つの村の系統の人間がみんな殺しあう様はおそろしく
- 15212 アンキ イテッケ エンラムコロア アニノ イタキ アンラム オシマ。
 an=ki itekke wen ramu kor a" anino itak(i) an=ramuosma.
 思う。決して悪い心を持たないでくれ」という言葉を私は聞き入れた。
 ▷◁×▷◁×▷◁×▷◁
- 15301 タバン イタキ タバン ハウキ シヌタブカタ アンコロ カムイ ユピ=
 tapan itak i, tapan hawki [i]¹³⁶, Sinutapka ta an=korkamuyyupi
 こっちの話はこっちの話(?) シヌタブカ (の) 神なる兄と
- 15302 トウラ オカイ アニケ アンコロ ユピ アナク ネイタネヤクカイキ ムシベ
 tura okay=an ike an=kor yupi anak neyta ne yakkayki muppe¹³⁷
 暮らしていたのだが、私の兄はいつであっても刀を
- 15303 ヌイエアン キルイネワ アノカイ アナク ケシタアンコ ケメイケ パテク
 nuye an ki ruy ne wa anokay anak kesta an ko¹³⁸ kemeyki patek
 彫っているのですが、私は毎日、針仕事ばかりをして
- 15304 アンワ アンカラ ピリカプ カケンチャイカタ トウウサ トイネ レウサ トイ=
 =an¹³⁹ wa an=kar pirkap kakencay tu usa toy ne re usa toy
 私が作った晴れ着は衣装掛けに二つの山(?)となり、三つの山(?)と

¹³⁴ 「kotan ikir 村の系統」【久保寺辞典稿】142】。

¹³⁵ isitomaka 驚く(?) <i-「それ」 sitoma 「～を恐れる」・ka 「させる」。

¹³⁶ 場面が変わるときの常套句だろうか。赤築三九郎(芽室)の物語では「aripaki an tek」〔北海道教育庁生涯学習部文化課編 2004: 16〕という表現が見られる。

¹³⁷ ムシベはムッペの誤植だと判断した。muppe < mutpe

¹³⁸ 山本氏の筆録資料によく見られる表現。「毎日。: kesta 'an kor ; kesta 'an to ta」〔旭川【方言辞典】250〕。

¹³⁹ 人称接辞だと思われる。

- 15305 ネットアン。シネアニタ ソイタアンワ アンカラベ ウライウライ アイネ
ne wa an¹⁴⁰. sineanita soyta=an wa an=kar pe uray(e) uray(e)¹⁴¹ ayne
なっている。あるとき、私は外に出て作ったものを洗って洗って
- 15306 アンチセニ オシピ¹⁴² ワ モコロアン オッタ オタシュッベカ アン・カムイ=
an=cise ne osipi wa mokor=an otta Otasut peka an=kamuyyupi
自分の家に戻って寝ているときに、オタシュッに神なる兄と、
- 15307 ユピ¹⁴³ アンカムイサポ オカイイケ ウコバイカイカ ソモ アンキワ オカイ
an=kamuysapo okay ike ukopay(e)kay ka somo =an ki wa okay=an
神なる姉がいて、行き来もしないでいたのだが、
- 15308 アンケ オタシュッ・カムイアンコロサポ エンベ オロワ アンライケワ イル=
(i)ke Otasut kamuy an=kor sapo wenpe oro wa an=rayke wa iruska kamuy
オタシュッの神なる姉は悪い奴から殺されて、それに怒った神なる
- 15309 シカカムイ ポンアンコロユピ イライケ クルカ シンダァ オキワ オイセ=
pon an=kor yupi i=rayke kurka sinta o ki wa oyse¹⁴²
小さい兄は???飛行船に乗って、ただ
- 15310 シネンネテク ケシタアントダ ウライケ パテク イタメコイキ パテク
sinenne tek kesta an to ta¹⁴³ urayke patek itamekoyki patek
ひとりで、毎日戦いばかり、斬りつけることばかり
- 15311 オワラ キンラネワ アンワ イルモンケシナ ウニシパ・エネ チカブ・エネ
owar kinra ne wa an wa irmonkesna(?)¹⁴⁴ u nispa ene cikap ene
全く錯乱して、しばらくの間、長者であっても鳥であっても

¹⁴⁰ 衣装掛けがたわむほどに着物が掛かっていると言うことだろう。参考: 「rikun kakenca/ranke kakenca/koerewewse 上の掛け竿下の掛け竿に(着物が)たわむようにかかっている(数多くの着物を作って持っているということの常套句) [N8709011.KY]」 [【中川辞典】423]。

¹⁴¹ uraye<huraye

¹⁴² 「oyse ただ。」 [【八重伝承 1】索引:125]。

¹⁴³ 註 138 参照。

¹⁴⁴ 「Mongeshna. adv. For a long time.」 [【バチェラー辞典】302]。

- 15401 ネブネヤクカイ レクツ トウイ レクチ チヤクカ ワ タネネツキ カムイ・
 nep ne yakkay rekuci tuy[e] rekuci cakka¹⁴⁵ wa tane ne ciki kamuy
 何であってもその首を斬り、今や神の
- 15402 ロロンベ ネワアン。ケンヌカムイカ エトウクパワ カムイ・ロロンベ ネワ
 roronpe¹⁴⁶ ne wa an. kennu kamuy¹⁴⁷ ka etukpa wa kamuy roronpe ne wa
 戦いとなっている。かわいそうに思った神(?) もおいでになり神の戦いとなって
- 15403 アン。ネブキアイネ タネポネテク エン チカブ ウワッテ チカブ エン・
 an. nepki ayne tanepo ne tek wen cikap uwatte cikap wen
 いる。戦ったあげく(?)、今やもう悪鳥がたくさん鳥、悪い
- 15404 チカブ ウワッテ チカブ アニサンワ トウイキヤクカ チュイヤクカ オロヤイ=
 cikap uwatte cikap anisan wa tuy[e] ki yakka cuy yakka or'yaykap
 鳥、たくさんの鳥が下りてきて(?) 切っても突いても全く駄目である
- 15405 カプワアン アニノ アン タカラ アンキ ワ モシ アンキ ネイ オロシ=
 wa an anino an takar an=ki wa mos an=ki¹⁴⁸ ney orospe
 という夢を私は見、目を覚ましたのだが、その話を
- 15406 ベ チストウラノ アンコロカムイ ユピ オレニ イタク アンキ アンカムイ
 cis turano an=korkamuyyupi oreng itak=an ki an=kamuyyupi
 泣きながら、自分の神なる兄に話すと、神なる兄は
- 15407 ・ユピ アヤポトゥラノ エンコタカニ シブニキヤン。アンコロカムイアキ
 ayapo turano “enkota kane sipuni¹⁴⁹ ki yan. an=korkamuy’aki
 驚きながら、「すばやく準備をなさい。我等の神なる弟を

¹⁴⁵ cakka だろうか。15111に「アレクツ チヤクカ」が出現する。

¹⁴⁶ roronpe < rorunpe

¹⁴⁷ kemnu kamuy 「かわいそうに思う神」だろうか。

¹⁴⁸ mos=an ki かもしれないが、カタカナの分かち書きと takar an=ki と対句になっている (takar は他動詞なので takar=an にはならない) と考えられることから mos an=ki とした。

¹⁴⁹ 「しぶ(ママ)に shipuni (伏) 動く」【吉田語彙】88; 「sipuni 【自動】身支度する」【釧路語彙】138】。

- 15408 カシケ アネチャシ クンベネクシュ イネハウキカネ ニシパ シプニ カムイ=
kas(i)ke an=ecas¹⁵⁰ kun pe ne kusu” ene hawki kane nispa sipuni kamuy
助けに行くべきなのだから」と言いながら（神なる兄は）長者の身支度、神の
- 15409 シプニ アンキワ カンド カシ シンダ チャラセキワ トウイマコタン コオマ=
sipuni an=ki wa kanto kasi sinta carse ki wa tuyma kotan kooman
身支度をして、天空を飛行船が流れるように進み、遠くの村へ行く
- 15410 ンフン アンヌキカネ マッコロタム ウソロシケ オマレキワ アンカムイ・
hun¹⁵¹ an=nu ki kane makkortam¹⁵² us[s]or oske¹⁵³ omare ki wa an=kamuyyupi
音を聞きながら、私は女の持つ刀を懐に入れて、神なる兄の
- 15411 ユビ オシ シンダ チャシテ モトサルベツ オッタ アンコロサポ アンコロ
osi sinta caste Motosarpet otta an=kor sapo an=kor
後を飛行船を走らせた。モトサルベツに私の姉、神なる兄が
- 15412 カムイユビ アンワ カムイコロ アキ ヤイトウラシテ オカイケ レンウトウラ=
kamuyyupi an wa kamuy kor'aki yayturaste¹⁵⁴ okay ike ren utura
いて神なる弟がひとりで成長しているのだが、三人で一緒に
- 15501 キワ ロロンベ カシケ オタシュッ アポンコロユピ カシケ オライクシュ
ki wa roronpe kas(i)ke Otasut a=ponkoryupi kas(i)ke oray¹⁵⁵ kusu
なって戦いに、オタシュッの弟に加勢するために

¹⁵⁰ ka, -si ocas（北海道西南部では ka, -si opas）「～を助けに行く」。

¹⁵¹ hun < hum

¹⁵² makkortam < mat 「女」 kor 「持つ」 tam 「刀」

¹⁵³ ウソロシケを文字通りローマ字化すれば usor oske であろうが、ussor oske を意図した可能性がある。15008にもアソケタ assoke (< arsoke) ta 「～の向かい側」があるので、ss が s に当たる表記で書かれる傾向があるかもしれない。なお、山本氏はウソロ、ウソロではなく、『ウブシヨロ』内ふところ」【山本小辞典】31】としている。

¹⁵⁴ 「yayturashte (1) 取組む (707) (2) 一人にて成長す。よちのぼる。 < turashi のぼる、遡る、攀上 (よじのぼ) る yai (自身) te (使役) - (1) 自身をのぼらす (2) 一人にて成長す。」【久保寺辞典稿】313】。

¹⁵⁵ ka, s(i)ke oray[e] という連動詞だろう。「カ(シケ)オライエ：～を助けに行く(?)。」【八重伝承 5】索引: 115】。

15502 シンダァ リキン レワ シチャス ワ エクベ オノンナ ヌカラ アン。

sinta rikinre¹⁵⁶ wa sicas wa ek pe onon a=nukar an.

飛行船を飛ばせて走ってくるのがどこからともなく見えた。

謝辞

本文の転載に当たっては釧路アイヌ文化懇話会会長の山本悦也氏に許諾をいただいた。深く感謝申し上げます。また 2018 年度千葉大学アイヌ語勉強会で本稿のテキスト部分を検討し、そのときにいただいた助言は反映されている。この場を借りて感謝を申し上げます。当然のことながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

訳註に使用した辞書類と略称

【アイヌモシリ】：浦田遊編（1998）『アイヌ・モシリ—幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会。

【アイヌ民話 2】：アイヌ無形文化伝承保存会編（1985）『アイヌの民話 2』アイヌ無形文化伝承保存会。

【アイヌ叙事詩】：鍋沢元蔵筆録、門別町郷土史研究会編（1969）『アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会。

【奥田語彙】：奥田統己編（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌学院大学。

【菊池クラ】：高橋靖以（2006）「菊池クラによる物語」北海道教育庁生涯学習部文化課編『知里真志保フィールドノート（5）』北海道教育委員会、pp.115-170。

【釧路語彙】：アイヌ語釧路方言語彙編集委員会（2004）『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「アイヌ・モシリ」山本多助作品集』釧路アイヌ語の会。

【久保寺辞典稿】：北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編（1992）『平成 3 年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿）』北海道教育委員会。

【四宅散文】：『四宅ヤエの伝承』刊行会編（2007）『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 歌謡・散文編』『四宅ヤエの伝承』刊行会。

【四宅韻文 1～2】：『四宅ヤエの伝承』刊行会編（2011, 2012）『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 韻文編』1, 2、『四宅ヤエの伝承』刊行会。

【田村辞典】：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。

【地名小辞典】：知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』楡書房。

【動物篇】：知里真志保（1976[1962]）『分類アイヌ語辞典 動物篇』平凡社。

【十勝語彙】：澤井春美編・著（2006）『北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書 3 アイヌ語十勝方言の基礎語彙集—本別町・沢井トメノのアイヌ語—』北海道立アイヌ民族文化研究セン

¹⁵⁶ rikin に使役接尾辞が付いた形は rikinte が予想されるが、rkinre となっている。

ター.

- 【十勝分類】: 本別町教育委員会編 (1989)『沢井トメノ 十勝本別分類アイヌ語辞典一人間篇・動物篇・植物篇・民具篇一』本別町教育委員会.
- 【中川辞典】: 中川裕 (1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 【人間篇】: 知里真志保 (1975[1954])『分類アイヌ語辞典 人間篇』平凡社.
- 【バチラー辞典】: ジョン・バチラー (1981)『アイヌ・英・和辞典』第4版、岩波書店.
- 【広野語彙】: 沢井春美・田村すゞ子編 (2005)『アイヌ語帯広方言の資料 田村すゞ子採録広野ハルさんの基礎語彙調査資料』札幌学院大学.
- 【方言辞典】: 服部二郎編 (1981)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 【八重伝承 1~9】: 北海道教育庁生涯学習部文化課編 (1993~2001)『八重九郎の伝承』1~9、北海道教育委員会.
- 【山本辞典】: 山本多助 (1981)『アイヌ語小辞典』ヤイユウカラアイヌ民族学会.
- 【ユーカラ集 1~7】: 金成まつ筆録・金田一京助訳注 (1959~1966)『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I~VII』三省堂.
- 【ユーカラ集 8, 9】: 金田一京助筆録・訳注 (1975)『アイヌ叙事詩 ユーカラ集IX』三省堂 (鍋沢ワカルパ・平村コタンピラ語り).
- 【吉田語彙】: 吉田巖 (1989)『北海道あいぬ方言語彙集成』帯広叢書編集委員会.

参考文献

- アイヌ語釧路方言語彙編集委員会 (2004)『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「アイヌ・モシリ」山本多助作品集』釧路アイヌ語の会.
- アイヌ文化振興・研究推進機構編 (2016)『平成28年度アイヌ語ラジオ講座テキスト』Vol.4、アイヌ文化振興・研究推進機構編.
- アイヌ民族博物館編 (1994)『山川弘の伝承』アイヌ民族博物館
- アイヌ無形文化伝承保存会編 (1985)『アイヌの民話2』アイヌ無形文化伝承保存会.
- 伊藤せいち (1978)「山本多助氏のアイヌ語」北海道史研究会編『北海道史研究』14、みやま書房、pp.1-11.
- 稲田浩二監修・浅井亨編 (1972)『日本の昔話2 アイヌの昔話』日本放送出版協会.
- 稲田浩二・小澤俊夫編 (1989)『日本昔話通観 第1巻 北海道 (アイヌ民族)』同朋社.
- 内田祐一 (1988)「帯広・伏古におけるチセと附属施設について」『アイヌ民族博物館研究報告』2、白老民族文化伝承保存財団、pp.1-31.
- 浦田遊編 (1998)『アイヌ・モシリ—幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会.

- 奥田統己編 (1999) 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』 札幌学院大学.
- 奥田統己 (2005) 「歴史研究とアイヌ口承文芸 (1) (2)」 本田優子編 『シンポジウム&公開講座報告集
【アイヌ文化研究の今】 1 「アイヌの歴史と物語世界」』 札幌大学ペリフェリア・文化学研究所.
- (2008) 「アイヌの英雄叙事詩における英雄像の地域差」 『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』
11, pp.69-75.
- 金成まつ筆録・金田一京助訳注 (1959~1966) 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I ~VII』 三省堂.
- 北原次郎太郎ほか編 (2003) 「アイヌ語釧路方言の資料」 『アイヌ語 樺太・名寄・釧路方言の資料—田村
すず子採録 藤山ハルさん・山田ハヨさん・北風磯吉さん・徹辺重次郎さんの口頭文芸・語彙・民族
誌 (「環太平洋の言語」 成果報告書 A2-039)』 大阪学院大学情報学部
- 切替英雄 (1996) 「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法
(1)」 『北海学園大学学園論集』 第 88 号、pp.123-286.
- (1997) 「アイヌによるアイヌ語表記」 『国文学 解釈と鑑賞』 第 62 卷 1 号、至文堂、pp.3-11.
- (1998b) 「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法
(2)」 『北海学園大学学園論集』 第 98 号、pp.315-349.
- (1998a) 「アイヌ語十勝方言話者による仮名書きアイヌ語テキストの分析」 『北海学園大学学
園論集』 第 96・97 号、pp.149-169.
- (2004) 「監修の辞」 アイヌ語釧路方言語彙 編集委員会 『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「ア
イヌ・モシリ」 山本多助作品集』 釧路アイヌ語の会、pp.12-21.
- 金田一京助 (1955) 「アイヌ語」 市河三喜・服部四郎(編) 『世界言語概説 下巻』 研究社、pp.725-759.
- (1993[1943]) 「アイヌの神典—アイヌラックルの伝説—」 金田一京助全集編集委員会編 『金
田一京助全集第 11 卷 アイヌ文学 V』 三省堂、pp.284-411.
- 筆録・訳注 (1975) 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 IX』 三省堂.
- 沢井春美・田村すず子編 (2005) 『アイヌ語帯広方言の資料 田村すず子採録 広野ハルさんの基礎語彙
調査資料』 札幌学院大学.
- 『四宅ヤエの伝承』 刊行会編 (2007) 『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 歌謡・散文編』 『四宅ヤエの伝
承』 刊行会.
- (2011, 2012) 『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 韻文編』 1, 2, 『四宅ヤエ
の伝承』 刊行会.
- 高橋靖以 (2002) 「小鳥サワ氏のアイヌ語資料」 佐藤知己編 『アイヌ語諸方言調査報告 (1)』 ELPR、
pp.183-208.
- (2004) 『アイヌ語十勝方言の助詞』 北海道大学大学院文学研究科課程博士学位論文
- (2006) 「菊池クラによる物語」 北海道教育庁生涯学習部文化課編 『知里真志保フィールドノ

- ート (5)』北海道教育委員会、pp.115-170.
- (2011)「アイヌ語十勝方言の指示表現」北方言語ネットワーク編『北方言語研究』1、北海道大学大学院文学研究科、pp.157-164.
- (2013)「アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型」『北方言語研究』3、pp.129-136.
- 田村すず子 (1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.
- 知里真志保 (1955)『アイヌ文學』元々社. (表紙の著者名は智里真志保となっている)
- (1956)『地名アイヌ語小辞典』楡書房.
- (1973[1942])「アイヌ語法研究—樺太方言を中心に—」『知里真志保著作集 3』平凡社、pp.455-586.
- (1975[1954])『分類アイヌ語辞典 人間篇』平凡社.
- (1976[1962])『分類アイヌ語辞典 動物篇』平凡社.
- 中川裕 (1982)「アイヌ語の助詞 un についての一考察」『言語学演習 '82』東京大学文学部言語学研究室
- (1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- (2006)「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」『表記の習慣のない言語の表記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.1-44.
- (2009)「アイヌ英雄叙事詩成立過程の時間層—ユカラにおけるイシカラ人の役割—」『口承文芸研究』第 32 号、口承文芸学会、pp.29-42.
- 中村一枝編注 (2014)『永久保秀二郎の『アイヌ語雑録』をひもとく』寿郎社.
- 鍋沢元蔵筆録、門別町郷土史研究会編 (1969)『アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会.
- 貫塩喜蔵 (1978)『アイヌ叙事詩 サコロペ (テープ付) SAKOROPE (狐の妖怪)』白糠町.
- 萩中美枝 (1980)『アイヌの文学 ユーカラへの招待』北海道出版企画センター
- (1994)「本文を読む前に」北海道教育庁生涯学習部文化課編『平成 5 年度 八重九郎の伝承 (2) (アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズ X II)』北海道教育委員会.
- バチラー、ジョン (1981)『アイヌ・英・和辞典』第 4 版、岩波書店.
- 服部四郎編 (1981)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編 (1992)『平成 3 年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』北海道教育委員会.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 (1993~2001)『八重九郎の伝承』1~9、北海道教育委員会.
- (2004)『知里真志保フィールドノート(3)』北海道教育委員会
- 本別町教育委員会編 (1989)『沢井トメノ 十勝本別分類アイヌ語辞典—人間篇・動物篇・植物篇・民具篇—』本別町教育委員会.

- 松本成美編 (2005) 『久摺』 特集号、釧路アイヌ文化懇話会.
- 山本多助 (1973) 『言葉の霊 イタケ カシカムイ』 ヤイユウカラアイヌ民族学会.
- (1981) 『アイヌ語小辞典』 ヤイユウカラアイヌ民族学会.
- 吉田巖 (1953) 「古稀談叢 十勝アイヌ 11 故老の談話記録」 『民族学研究』 17/3-4、pp.83-93.
- (1957) 『帯広市社会教育叢書 No.3 愛郷譚叢』 帯広市教育委員会
- (1989) 『北海道あいぬ方言語彙集成』 帯広叢書編集委員会.

(さかぐち りょう・千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

The Text of a Heroic Epic “Sakorpe” Recorded by Tasuke YAMAMOTO and its Linguistic Characteristics

SAKAGUCHI Ryo

Summary:

The paper consists of two parts, the first half is the linguistic analysis of “Sakorpe” and the second half is the text of “Sakorpe”. Sakorpe is a heroic epic from the eastern part of Hokkaido. This “Sakorpe” was recited by Humi HONDA (?~?, born in Yamuwakka, Tokachi) and recorded by Tasuke YAMAMOTO (1904~1993, born in Harutori, Kushiro). Tasuke YAMAMOTO had been worked to preserve and develop Ainu culture and to hand it down to the next generation. As one of his efforts toward the preservation of Ainu culture, he recorded materials for the study of Ainu language using Japanese katakana. His work deserves recognition as a record of the Ainu themselves.

Outline of the text:

(A man of Otasut narrates) I lived with only my elder sister, who took care of me. One day, after my sister went out, a man came into my house, saying, “I have killed your sister.” Hearing it I got angry and fought the man and went to his house. I killed everyone except for the man’s sister. In addition, I killed the man’s relatives. After that, someone said to the man of Otasut “Stop killing people! Don’t think negative thoughts!”

(A woman of Sinutapka narrates) I lived with my elder brother. One day I dreamt that the woman of Otasut was killed by a villain and her brother went to take revenge and is in a predicament. I told that to my brother and we decided to go to the man of Otasut's rescue. On the way, I saw three people of Motosarpet come to join forces with the man of Otasut.